大和名所圖会　五

部
類
冊　號
架　函
三宅氏藏書

ル 4
4695
5

大和名所圖會巻之五

葛上郡　宇知郡
高市郡　目録

葛城山
一言主社
石橋
金剛山寺 朝原寺 石寺
高天寺
蜘蛛窟
高天彦社
松原井
極樂寺
船丘
朝妻山
葛本池
故葛木寺
伏見社
菩提寺
壺井
風森
櫻井
細井
中位寺
高鴨社
御歳社
多田社
長柄社
水分社
高丘廟
橿原宮
腋上嗛間岳
葦原寺
孝安天皇陵
白鳥陵
彈琴原
池心宮
葛城川
巨勢社
大倉社
巨勢跡
今木雙墓
大穴持社
御越川

早稲田大学図書
門 ル 6 號 1695 巻 5
早稲田大学図書館 昭36.6.21 受入 藏書

鴨都波社
小明原
室山
磐余若櫻宮
龍宮窟
小嶋城
門見寺
高天社
荒木社
良家寺
宇智陵
二見社
中村社

來迎寺
千塚
吾妻社
阿多大那
榮山寺
宇野親治宅
王墓
一尾背社
宇智社
丹生川
火雷社
統社
安井寺

戒那山
重丘
室秋津嶋宮
阿陀社
後阿陀墓
龍池社
楢井
霹靂社
矢田畠笠辻
丹生川社
二見城
櫻井寺
上村城

鴨山口社
大重社
孝昭天皇陵
阿陀墓
菅原長岡宅
庶人墓
鳳凰寺
観音寺
御霊社
吉祥院
多澤川
櫻井
神福山

大澤川
蓮華寺
葛松社
吉野川渡口
藤武川
栗原井
石川廢精舍
廢大官大寺
廣嚴寺
櫻池
豊明宮
畝割塚 古墳 石燈籠 春井
飛鳥社 旧井

佐太雄社
眞土山
大飼寺
狹嶺山
鴨事代主社
廢藥師寺
孝元天皇陵
豊浦池
難波堀江
廢輕寺
檜隈陵
厩阪
板蓋宮

大澤寺
戸立山
内大那
高市
秀泉井
田中宮
田見池
耳梨社
藤原太人鹿第
曲峽宮
廢川原寺
厩坂宮 旧池
川原寺

楊貴氏墓
角田川
安日寺
國分寺
鷲栖社
馬立社
大野丘塔
味樫丘
小墾田宮
境原宮
橋寺
神名備山
飛鳥寺

飛鳥社
飛鳥川
雷丘
藤原
藤原宮御井
御陵山
氷室趾
加夜奈社
菊淵坐墓
勾池
後園
遊岡
檜隈川

遠飛鳥社
飛鳥里
矢釣山
大織冠第址
衣通姫家池
氷室址
滑谷陵
金剛寺
龍福寺
眞名池
遊田丘
倭彦命墓
於美社

飛鳥川原宮
七瀬淀
八釣宮
法光寺
淨御原
和飯社
大仁保社
都塚
田麿第
嶋宮
岡本宮
鬼廁
欽明天皇陵

荒塚
大國社
大原
葛井原
細川山
淺茅原
南淵山
飛鳥川上社
呉津社
岡寺
治田社
鬼肉几
文武天皇陵

因可乃池
西圓堂 律學院 御相殿 正覺寺 脩南院 藏王堂
大經藏 宗源寺 傳法堂 明王院 常樂寺 御廟
菅田池
苑部墓
毛無岡
神南備
信貴山
龍田山
三室山
立野
廣瀬行宮

冨小川
手水屋 東院 三寶院 觀喜院 金光寺
額安寺
龍田新宮
三田屋
淺小竹原
業尾
龍田川
三室岸
百濟宮 百濟大寺
沖瀬井

法隆寺 金堂 講堂 五重塔
三經院 夢殿 禮堂 新堂
聖靈院 舎利堂 北室律院 圓成院
常樂寺
竹原井
亀瀬山
占手山
神岳社
信貴古城
大味川
小倉岑
列乙池
大福寺

沈水香圖 上堂
繪殿
中宮寺
如法經堂
芦墉宮
清水墓
磐瀬社
姫津田池
猪上社
陶屋址
紅葉川
龍田社
櫻嶺
百濟川

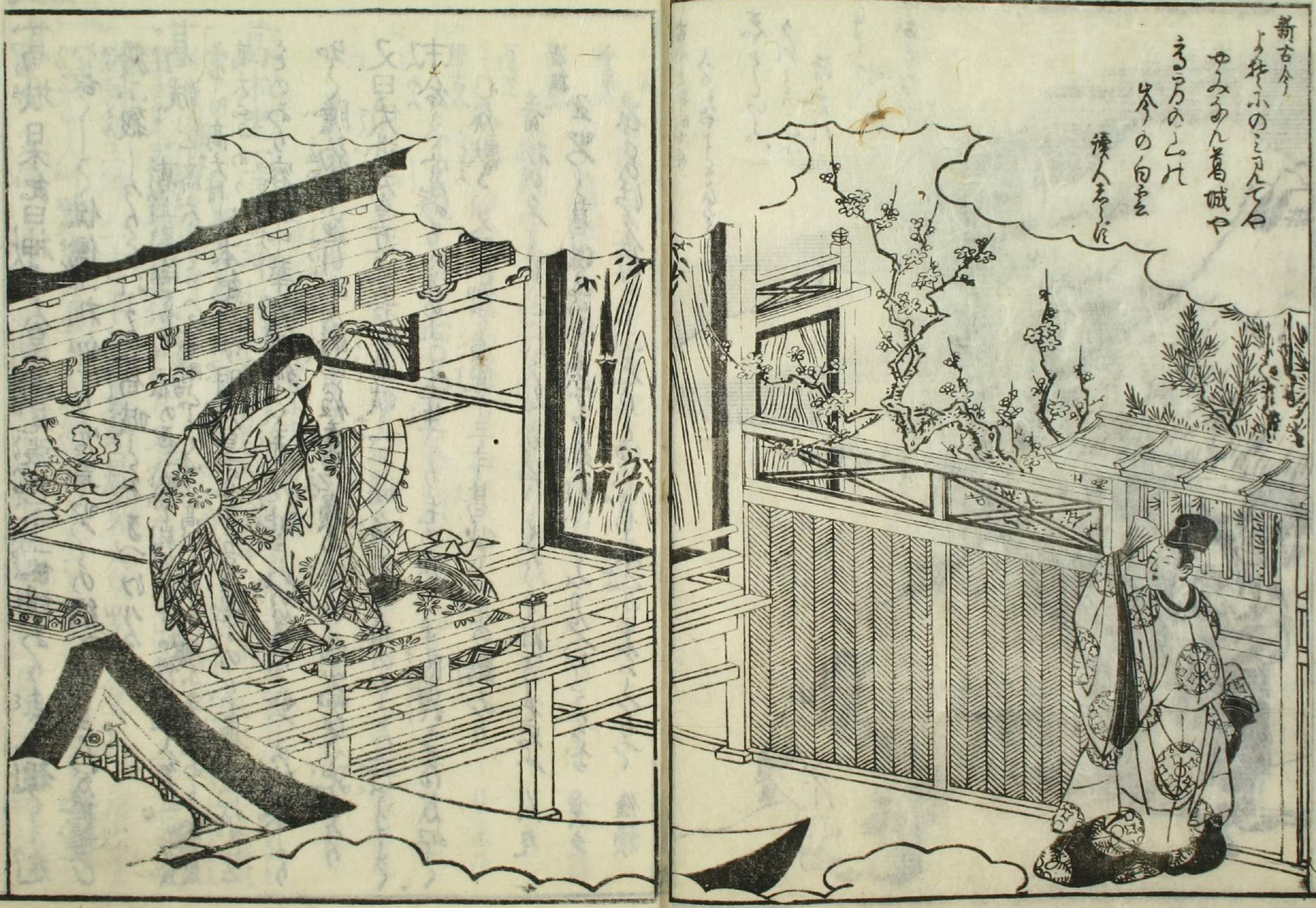
長林寺　櫛玉比賣社　的場橋　廣瀬川
澤田川　廣瀬社　牧野墓　成相墓
三立岡墓　葦田原 同池　日見橋　船戸渡口
片岡社　久度社 同寺 山里　孝靈天皇陵　達磨寺
放光廢寺　氷室址　三松廢寺　片岡山
片岡跡　朝原　小松社　武烈天皇陵
顯宗天皇陵　大幡社　志都美社　大坂山口社
龍峯寺　福應寺　天羽雷社　當麻山口社
萬歳山　二上山墓　葛木二上社 二座　腰折田
威奈墓　二上山　當麻寺 新曼陀羅 法華堂 講堂 紫雲庵
奥院　染野寺 染殿井 櫻　高雄寺　横佩墓
正行寺　多久蟲玉社　淳孔宮　調田社
長尾社　金村社　宇佐社　影現寺

子嶋社　靈鷲寺　高生社　壺阪寺
五百羅漢石　曼陀羅石　鷹鞭山　高取山城
子嶋寺　竹取　波多社　佐田丘
重阪川　櫛玉社　眞弓丘　越智
眞弓陵　許世都社　齊明天皇陵　巨勢山社
宣化天皇陵　鳥坂社　石椋小野　牟佐社
益田池 碑銘　久米社　久米川　軽樹社
安寧天皇陵　綏靖天皇陵　久米寺 塔中銘　鬼頭田
畝火山　畝火社　懿徳天皇陵　娘子塚
大窪廢寺　高市社　井谷井　御陵山
神武天皇陵　宗我都社　蘇我河原　小綱邑
天高市社　忌部邑　人麿社　金橋宮
太玉命社　川俣社　稲代社　天神社

長法寺

法器ノ山寺

菅丞相ノ山荘


新古今
よそにのみ見てや
やみなん葛城や
たかまの山の
峯の白雲
読人しらず

葛城　日本紀曰神武天皇高尾張邑に土蜘蛛あり身短く手足長くして侏儒に相似たり官軍葛の網をむすびて掩襲ひ殺しけるよりこれ葛城となづけける

葛城山　葛上忍海葛下三郡の西に連り峯の西は河州に續く又金剛山ともいふ高サ二百十六丈餘に寺院あり一箇の勝地なり

高天村　日本紀曰欽明天皇元年五月龍にのりて虚空をかけるものあり容貌中華人に似たり青き油ぬれの笠をきて葛城の嶽より生駒山に馳り午の時に住吉の松嶺の上より西に向ひて馳去りぬ

又曰天武天皇九年二月葛城山に鹿角あり角の本二枝にて末合て完あり完の上に毛生り毛の長さ一寸即異なりとて献る　又曰同御宇白鳳十三年葛城山に四足の鶏あり

萬葉　青柳のかづらき山にゐる雲のたちてもゐても妹をしぞ思ふ　人丸

後撰　玉かづら葛城山のもみぢ葉は面影にのみ見えわたるかな　貫之

金葉　夜そのほえりまくに志のとゆ葛木山に雲かゝりて　俊頼

千載　葛城や高間の山の桜花雲井のよそに見てや過ぎなん　顕輔

新古今　葛城や高間の桜咲にけり立田のおくにかゝる白雲　寂蓮法師

新勅撰　こゑはさき来ぬる青柳の葛城山にかすみたなびく　従三位家隆

同　まやとしゆく葛木山の雲まより都の空にかすみたなびく　後京極

續古今　さくら花さかりなる時は葛城の山の名をさへ雲にかくして　家隆

同　白雲や花よりうへにかゝるらん桜ぞたかき葛城の山　順徳院

同　葛城や高間の山の花さかり雲のよそなる雲ぞかゝれる　有家

葛城山の和歌廿一代集に七十三首あり

葛木坐一言主神社　森脇村にあり長柄豊田宮戸寺田多田五ケ村の氏神なり寛文記曰葛城大明神は一言主といふ女神にてましまし昔は葛城山の嶽に宮居ましまししが今は其麓の田の中にいませりとかや　舊事紀葛木一言主神倭國葛上郡にます坐るは素戔烏尊神子なり又天孫本紀曰火々出見尊十三万六千年時速刺利主神又一言主と云日本紀曰雄略天皇四年天皇葛城山に狩し給ふ時一言主神と共に獣をおひて遂に夕陽に及びて田猟罷めて天皇を来目水に送りたてまつる時村民

こと〳〵く有德の天皇と称賞しける 當社ハ延喜式神名帳出 一言主神ハ孔雀明王

と号す 一言主社記 葛城の神ともいへ是ハ一言主神ハ一説ふ大穴道尊の子

味鉏高彦根命なり 釈日本紀 葛城山の東下高宮岩上ふむかへて鎮座す 雄略天皇

御狩の時一言主神出て天皇と共ふ遊興をなしたまへて田しの人を手ふ噴めて

神を土佐國ふうつしまつる其後天平寶字八年従五位上ふ叙せらる 土佐國ふうつ

しぬへるハ俗田せざるよし旧説仍是く読ふ續日本紀ふあらはせり 神階ハ貞観元年

正月廿七日葛城一言主神を従二位に叙せらるゝよし三代実録にみへたり

拾遺

岩橋の夜の契もたえぬべしあくるわびしき葛城の神 春宮女蔵人左近

續古今

君がいのるしるしハ一言主神の宮二ろ頼みかけはきえなるらん 加茂季人

續後拾遺

めつらしき神も通ひてかたらぬみゆる夏のうえにし 賜従二位為子

夫木

多ゑるぬるかくも全契るとも一言ぬしふ祢ぎそのけ法る 顕昭

今ハとのほとり勝して葛城山の入りしどろふまうのぼりふて家くみをさめてうちかくのれかのれ花をさかりふて家くへうまふみをたもうちかのれハを

艶なるふハの神のとくらちあしく人の口さかなく

春にひつく人待れを

猶かくし花ふ明り神の顔 そう成

望葛城山 古詩體

葛城山上白雲遶

萬古千秋白日懸

云是昔八飛升路

只今何處覓神仙

連山東南赴大嶽

拱如群帝朝中天

往昔妖星薄北斗

元弘天子下殿走

繚垣南山建行宮

給谷闢門分隘守

當是宸極嬰蒙塵

維南有木薜天日

英雄心事兼精忠

誰知當日葛期儔匹

紆帶峥嶸據葛城

下畧 南郭

金剛山
大日堂
文殊菩薩
三十八社

石橋 河内志曰平石村の山上にあり其廣さ五尺長七尺ばかり右の方におし鋲あり左の方にも二ツあり又その四ツあり兩端稍隆し擴基あり加ふるに

形勢和州葛城山につゞけり

實に足を入る道なり

通路に石橋をかけんとぞ衆神に命ぜられけるが其なかにかつらきの峯なる

一言主神容貌いと醜かりしかば晝の役をさけてよるのミなりひし

より橋なかばにて渡したりければ行者いかりて一言主神を呪縛して深谷に

落したり けふの書にもかく見えたれども大意を述るのミ

金峯山記曰役小角ハ一言主神を縛繫し谷底に繫る 然るに一言主神怒りて人に託して

讒して曰役優婆塞ハ國家を傾んとすと 文武帝勅して小角を召す

然るに小角空に騰て飛去る 官吏その母を捕ふ

小角已ことを得ずして出て縛せられ伊豆の大嶋に遠流せらる 日本霊

異記にも見えたり 此説ハ非説にして信用しがたし 實ハ役行者葛木

山に住して呪術をもて人を惑はす 外從五位下韓國連廣足といへるもの小角を師

として其能を害して帝に妖惑を吐き大に讒して小角を文武天皇

三年五月伊豆の大嶋に遠流せらる 時に小角ハ鬼神を

使して水を汲ミ薪を樵しむ 若命を用ひざるものを

ことごとく呪縛をもして云云

古今

葛城やくめぢの橋にあらばこそおもふ心を中そらにせめ 讀人しらず

後拾遺

中たゆる葛木山の岩橋をふみ見ることもかたくぞありける お模

千載

葛城や渡しもはてぬ物ゆへにくめの岩橋苔おひにけり 師頼

同

かつらきやくめぢにわたす岩橋の絶にし中となりやはてなん 能宣

續後撰

葛城や夜る契の岩橋もわたして通へねたくひるらん 前内大臣家

續古今

葛城やわたしもはてぬ岩橋も夜の契はありしそこらけ 家隆

同

かつらきの夜の契もかくしらしへたてゝふみみぬ岩はし 匡房

續千載

葛城やくめの岩橋中たえてけふ人の契なきかな 吟泉大納言

新千載

山風にあらしのゆふべや人わたしたるよの葛城の道 大納言實超

同

わたるやく米路の橋も中絶てかよふのミそ葛木の神 實方

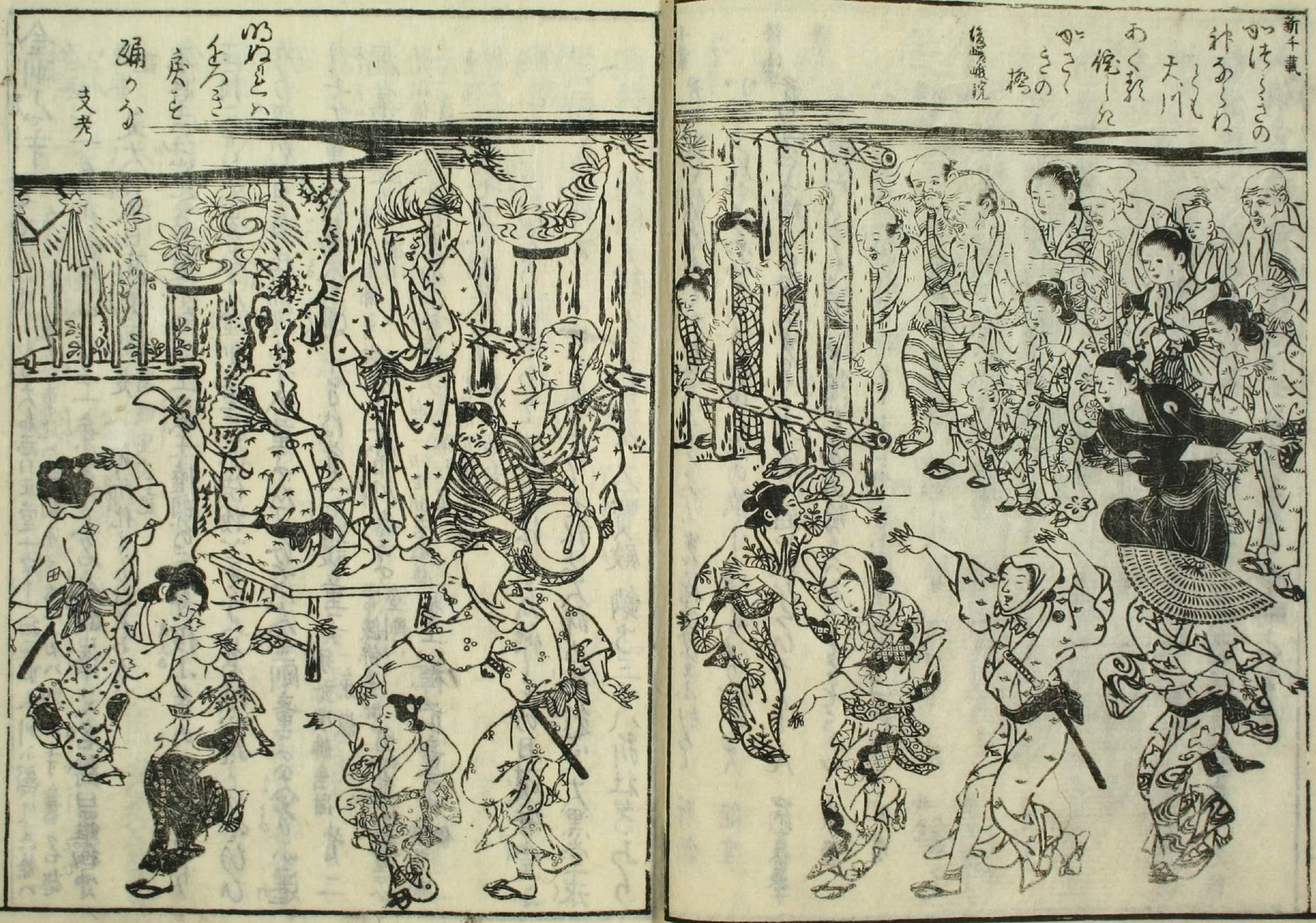
舊事紀曰大國主命のさとより滴潮の凝りて磤馭盧嶋とよめる 日本紀

霊山といへるも此霊山金峯葛城なるべし 纂疏宝山記

神皇正統記云花嚴經曰東北海中有處名金剛山從昔已來諸菩

薩衆於中止住現有菩薩名曰法起與其眷屬諸菩薩衆千二百

人倶常在其中而演說法云云 是大和國の金剛山なり


新千載
後嵯峨院
支考

金剛山寺　葛城の山頂にあり大和志曰正堂一宇小祠二本州に屬す其余ハみな河州に隷す東北ハ則朝原寺東南ハ則石寺舊名楮石寺と一名神祇室山又名一乗峯又名金剛峯又名縛日羅獨寺
酉誉記　又大日本日高見國　葛城宝山記　足ハ日神所化より山名あり
本堂ハ法起菩薩不動明王蔵王権現の三尊役小角の所作なり
正月二十日大山家八大金剛童子に供物をそなふハ葛城心経をとなへめぐりひらく役行者自然涌現の十六童子なりとけて八大金剛童子の宝窟に遷し七大童子ハ葛木に遷しまつる第一経護童子　須弥頂佛垂跡　一乗嶽　第二福集童子　大福山　師子相佛垂跡　第三常行童子　常滅佛垂跡　金剛山　第四集飯童子　須弥相佛　梵相佛垂跡　二上嶽嶺　第五宿着童子　度一切世間苦悩佛垂跡　紅宿　第六禅前童子　垂跡　般若嶽　第七羅網童子　雲自在佛垂跡　釈迦留岳
開山堂　役行者の遺像あり六月七日法会を修しその日護摩堂に柴燈の護摩あり宗旨眞言にして弘法大師の御影堂大黒堂求聞持堂　辨財天社　文殊堂　石寶殿　鎮守三十八所社等あり

金剛山ハもと大和河内の境にしてその本堂ハ大和の内九坊ハ河内なるよしされども境内ハみな和州の内なりとぞ　宗文大和志社記にみえたり
南遊紀行云　貝原篤信　葛城山ハ大和の外岩内よりハ近國よりも見ゆるの高山なり其絶頂に葛城の神社並大社あり一言主の神といふ役行者堂あり山上より二町西に下りて河内國金剛山轉法輪寺あり役小角の開基也是山伏の嶺入して修法する所也僧坊六坊あり皆妻帯大和河内の農民此神を甚尊崇し社の下の土をとりもちかへりて我田地に入ればその稲よく實りて虫くはずとて参詣の人絶し皆宿坊にて宿する者多し檀那にあらざれば宿を借さずとぞ葛城の社ハ山のいとたかき頂上にて大和國之金剛山の寺院ハ西の方少しひききの所に在て河内の内也葛城の東社のうしろの宗不動あり是大和河内の境也葛城のふもとにある大山をかいふが嶽といふ河内にて足を篠峯と號す此ゆゑに葛城山といふやまハ葛城金剛山の峯つづきなる山なりと云云
金剛山土産　桔梗　絶品なり　防已藤　あを東て緒に縄に代る　これを名づけてなるとぞ

堀川二度百首
つゝる木陰よ
出る稲妻哉
山伏のうへ
火かとこそ見れ
兼昌

朝原寺 寛文記曰金剛山の本堂より九八町坂中に
あり金剛山七坊の内なり
此寺の霊宝とハ恵心僧都自
畫の彩大黒天像ハ伝教大師の作釈迦如来ハ春日の作田植乃毘沙門
ハそこいふしハ自田なる人ハ祈ひしる像とかや今に御足に土つきてあ
とりハ八王子社あり中須比叡山の八王子断絶におよびし時此所より
勧請せりそれより比叡山繁栄せしとなりハ金剛童子堂辨財天乃
やしろ鎮守三十八所社あり
石寺 寛文記曰金剛山本堂より九八町紀州の方に至る
坂中にありこれも金剛山七坊の内なり 本尊ハ石仏の薬師如来
これハ役行者石を海國より飛来り給ひしと云傳ふこのゆへに石寺と号けれ
境内ハ方十町余あるよし行者堂葛城明神金剛童子の堂辨財天社
鎮守二十八所社あり
南遊紀行云篠峯と葛城山との間に水越山嶺とて大和河内往来の
道あり是楠正成吉野殿へ往来の道なりしとなん金剛山より西の
方へ下る是ハ水分の社に至る是本乃なり其坂六十町ほど河内なり大和より

地名行く故に路長し又坤の方へ二十七町下りて千早村に至る是より
なり又麓より廿餘町くだりて金剛山とよぶ山との間に楠正成
の石塔あり頗大なり石燈籠二基并石の瑞垣あり石川郡の投守政
建立なり即南に向へり正成の墓摂州湊川にありてこれハ躯をかくす
あるハ首塚なりと云楠足利氏より正成の首を故郷へ送られしか
埋しなるべし 千早の城跡ハ此内國にして
大和國にわたれるよし記されたれ
大和巡覧記曰或説に葛城山ハ日本四番の高山なりと云此山に登る一里余ハ和
河内摂津西海眼下に遮る
高天寺 高天村にあり正堂一宇僧舎六院
界内に鶯宿梅蜘蛛窟あり 寛文記曰高天寺ハ金剛山の寮
なりしを落て坊ありいましハ伽藍嵬々たりしらなの代より頽廃
して僅に三間四面の堂に十一面観世音并釈迦の霊像を安置ス其側に遍
照院といへる茅屋の庭前に孝謙天皇の御宇に鶯やどりし和歌ある
詠しける梅の本今にあり

称名院殿大和紀行曰
ゑる天ちの物陽
毎朝来の梅乃
樹ちられ乱に
おとしくに
よしら一ち
たかり株
枯朽しくら
ありかゝりた
小枝わかく
朽てふ
梅もさか
ま乃
むかし
八百ぢ
舞
のことを
学ぶ古調のすゝめん天王寺
南洞

古今秘抄曰孝謙天皇の御宇大和國高市郡に僧あり彼寺の童
ありしが或時空しくなりし師の僧歎きて忘れかたく思ひしに
明日成道なりし秋をまちて次の年の春の花の咲く梅の枝に
哢其聲なきけれ初陽毎朝来不相還本栖と囀りけるを文字に写
しけれは古今ノ意 初陽の鶯毎朝来れどもあはで還る本乃栖
古今ノ巻抄 八近江國
ある山寺とあり

南遊紀行曰むかしの山の東に在る麓より廿町けかり登る坂を登りて
高間に至る高間の名ある所也此所坂路けはしく郷内ひろく村々多し
高間よりのぼりての嶺まで三十町ほど高間に桜多し鶯の名所也
大なる社あり高天寺あり俗にいふ鶯の初陽毎朝来と囀り
し梅ありし所也是より坂路甚けはしく高き崖ありてあやふき所
おほし竹輿にものりかたし又此所より大和の國中よく見ゆ

蜘蛛窟 俗傳にいふ上代此に土蜘蛛ありて御門御悩ありしゆへ勅使を立させられ殺し滅し其の窟に鎮めしとなり件乃くもを巣の岩のあるよし今も余所よりハちかよりかたくもなし
土蜘蛛の事日本紀に出此巻首に見えたり

高天彦神社 高天村にあり今彦澤権現と称す北窪極楽寺村の氏神とす 神名帳續日本紀續日本後紀三代實録出

松原井 北窪村にあり

極楽寺 極楽村にあり

船丘 船路村にあり船の形に似たりよりて名とす

朝妻山 朝妻村の上にあり金剛山より其坂路に避介の小坂といふ 名所図にあり日本紀出 朝嬬行宮天武帝こゝに幸す

葛木池 朝妻村にあり

故葛木寺 又妙安寺といふ今ちか村其跡といふ 聖徳太子の御建立なり

伏見祠 伏見村にあり今八幡宮と称す

伏見山菩提寺 小野荘六村の氏神とす 俗傳に菅原寺といふ行基菩薩の開基也本堂鐘楼二王門僧舎六院あり

壷井 佐味村にあり泉甚にして美也

風森 東佐味村にあり

櫻井 櫻井村にあり

細井 神通寺村にあり其流れ清くして田畠に灌く

中位寺 福西村にあり 巡礼記に出

高鴨阿治須岐神社 三代實録に出 神通寺村にあり佐味荘六村の氏神とす神名帳に及び神宮寺あり一名金剛寺此寺に大般若経あり跋曰施入大和國葛上郡 高鴨大明神云云

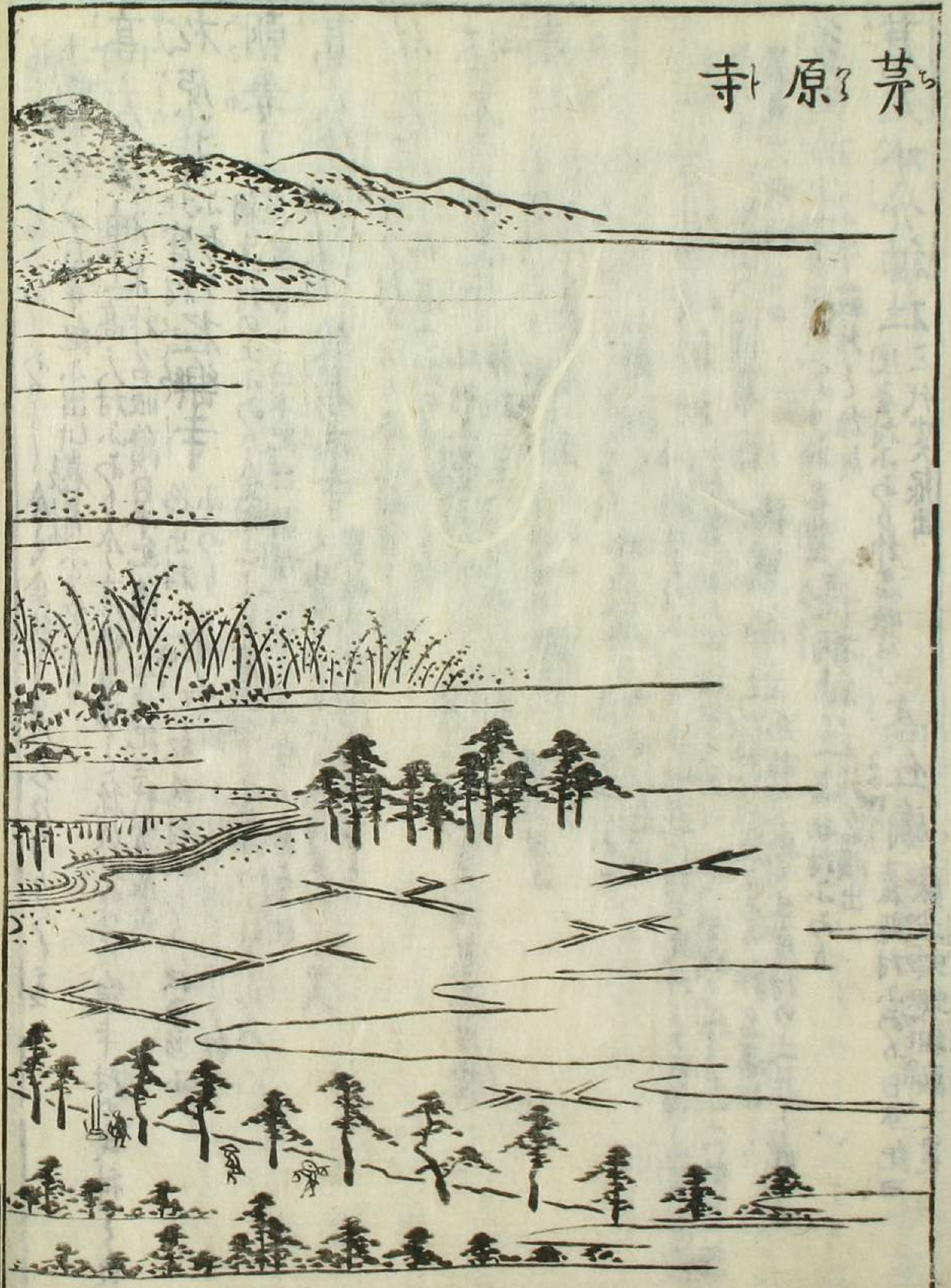
御歳神社 持田村の東にあり神名帳出 西持田小殿下茶屋村の氏神とす

多田神社 多田村にあり神名帳出 今荘神と称す

長柄神社 長柄村にあり神名帳出

葛木水分神社 関屋村にあり神名帳及び三代実録出

高丘廟 森脇村にあり日本紀曰 蘇我蝦夷祖廟を建


茅原寺

新六帖
春野に鳴雉子
光俊

巨勢野 古跡 里の上に有 今村

万葉 巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ偲はな巨勢の春野を 坂門人足

新続古今 岩もとの氷もとけて川上の巨勢の春野はわかなつむなり 権中納言為重

新勅撰 玉椿みとりの色もみえぬまて巨勢の春野は雪ふりにけり 刑部卿範兼

千五百番 ゆきかへる巨勢の春野のあとなれはこれか末まてしのひゆく 季経

今木雙墓 古瀬の泥村にあり日本紀曰中臣鎌子連入鹿が滅しこと 蘇我雙墓に葬埋する所とそ

大穴持神社 朝町村にあり今は臨明神と称す 祭るに華表あり 神殺するし故實としていふ 神名帳出

巨勢川 御所村の東に至りて葛上川に入 源は越山領関屋長柄森脇を經て

鴨都波八重事代主命神社 御所村にあり近隣五ケ村の氏神也 神名帳文徳実録三代実録出

來迎寺 竹田村にあり 飯岡山と號す

戒那山寺 倶尸羅村にあり此山中に瀑布ありこれを救丈瀧といふ 寺ありし時は安置せり 戒那千坊といふ

鴨山口神社 倶尸羅村髙鴨山にあり松一株あり樹下に小祠あり 土人云樹頭に時々聖燈あらはる

小明原 右同村にあり 千塚 右同村にあり

重丘 櫛原村にあり緑樹鬱茂し 林中に小祠あり

神武の行者誕生の所なりとく 舒明天皇六年の出誕より今に至るまで 一千百五十有余年の浄刹なり

孝安天皇陵 玉手村にあり玉手丘上陵延喜式に見えたり 陵考白高九間根廻百四十間垣二十四間

白鳥陵 冨田村にあり 日本武尊東夷を征し給ひて帰る時伊勢國能褒野にして崩じ給ふ御歳三十 能褒野の陵に葬奉りしに白鳥と化し大和國をさして飛び給ひしかば群臣棺をひらき見れば明衣のみあり 白鳥は大和國琴弾原にとどまり給ひしかばそこに陵を作られて又白鳥飛びて河内國舊市邑にとどまり給ひしかば陵を又ここにも築く 白鳥の三陵とよびて後に天に翔り給ひしかば衣冠を葬り給ふとぞ 日本紀

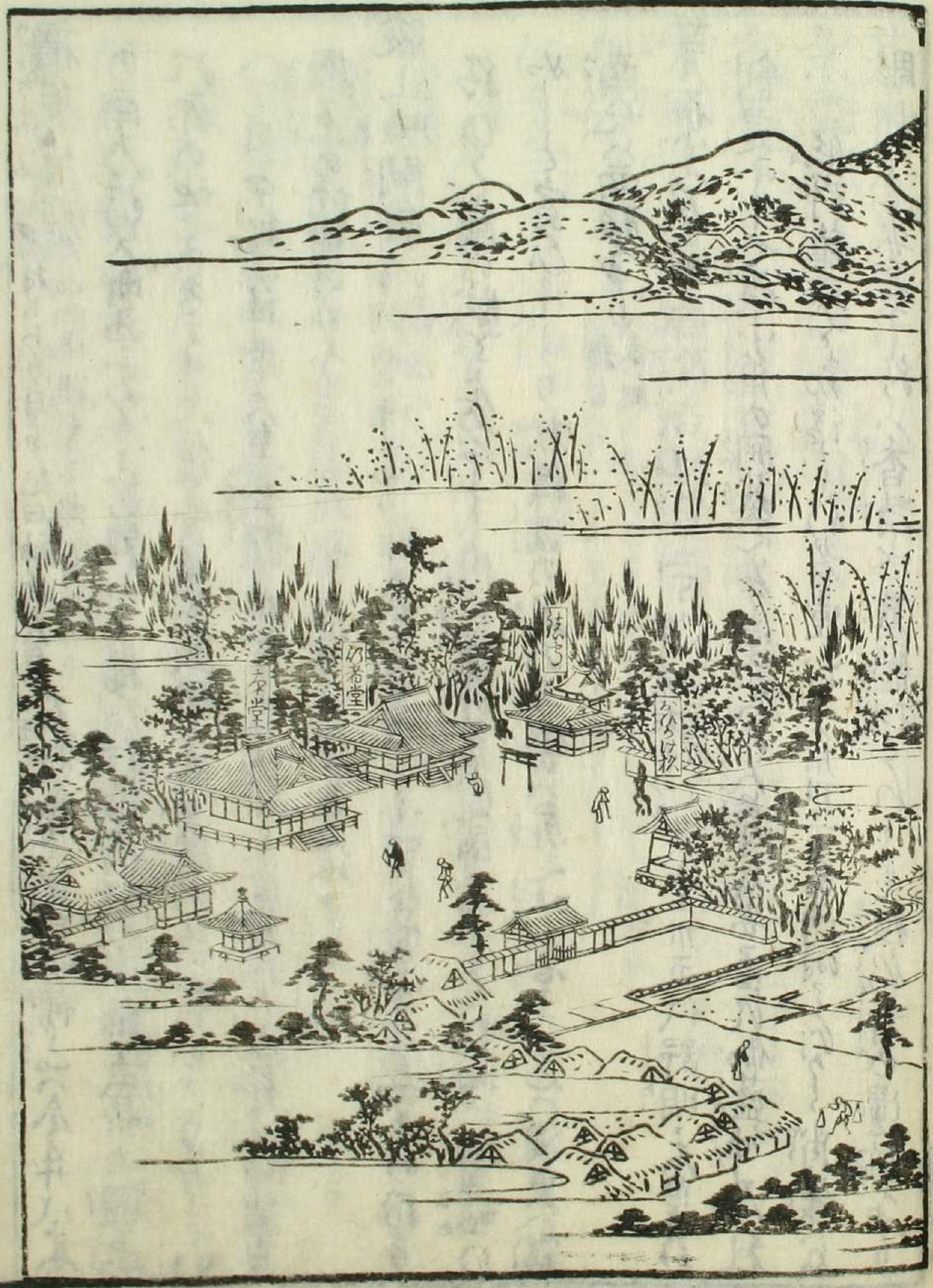
琴弾原 冨田と谷二ケ村の間にあり

池心宮 池内御所二ケ村のあひだにあり日本紀曰孝昭天皇元年に遷都ありこれを池心宮といふ

葛上川 源は金剛山よりながれて持田寺田御所村をへて 忍海郡に入

巨勢山口神社 古瀬村にあり神名帳及び三代実録出

大倉比賣神社 古瀬西合村にあり 神名帳出



橿原宮 柏原村にあり日本紀曰神武天皇畝傍山の西南橿原に都を 大和巡覧記曰畝傍山ハ今井八木の南にあたれり大町西にあり山の巽にかしは村柏原村あり神武帝の遷都此都の地こゝの辺ありや一説に山の東大久保と云所橿原の都のあとなりといへり日本紀に神武天皇長髄彦をうちて天下を定め給ひ畝傍山の東南橿原の地國のまほらの故都と作てたてまつるなり 下畧

腋上嗛間丘 本馬村の南にあり 一名望國山 神武天皇卅一年四月帝嗛間丘にのぼり給ひて國の状をめぐらし内木綿の真迮國といへども蜻蛉の臀呫のごとしと宣ひしより秋津國の名あり臀は尻也呫は掌也西は頭東は臀南北は両ね也あり 釋日本紀

茅原山金剛壽院吉祥草寺 茅原村にあり一名茅原寺 人皇卅五代舒明天皇乃創建にして役小角の開基也本堂には大尊ならびに役行者伽藍神乃社には熊野権現を勧請し行者堂には小角卅二才の御ときの肖像なり彫刻して安置し給へ香精水笈懸杉これらも役行者の遺跡なり

葛木大重神社 楢原村にあり 神名帳出

吾妻祠 室村の東鉢伏山の東にあり

室秋津嶋宮 北を望めば白鳥陵也 今室村その所なりといふ人皇六代孝安天皇二年十月都を室の北に遷さる秋津嶋宮と名つけ給ふ 日本紀

孝安天皇陵 室村にあり 延喜諸陵式に出 陵考曰宇ハ所多山根廻て百二十六間高廿九間坂百四十二間 八幡祠あり

磐余若櫻宮 此宮村の須内世寅に當て西原といふ所あり 應神天皇こゝに皇居なされしとぞ

阿多大野 宇智郡阿多村にあり

室山 室村の上方にあり

金葉
玉葛さくあたの大野の白露を吹なみたりそ秋のはつ風　太宰大貮長実

続後撰
夕露のあたの大野のまくず原かぜふくからにむしの聲　後京極院

新後撰
形見とぞあたの大野の萩の露うつろふ色はいはひもぞする　定家

続後拾遺
ちれば又このあたの大野のまくず原かへる風に秋風ぞふく　後九条内大臣

夫木
秋風にさけぞうつろふ白露れあたの大野にうつろふかな　家宗

阿陀比賣神社 阿陀郷原村にあり

阿陀墓 阿陀村大家山にあり 延喜式曰贈太政大臣藤原良継の墓之

龍宮窟 原村にあり窟中に霊泉あり 畔もま廻を

一字松
女郎花しろうとも
りんゆるかあされ太郎ふ
たくてとおとへそ
依理太夫敬季

ひよろくと
杉露
しや
女郎花
ちまん

榮山寺　小嶋村にあり役優婆塞草創の地にして元正帝の御願養老三年藤原武智麿の建立なりしく伽藍巍々たりしか年経て今僅に遺りたる金堂の本尊薬師佛日光月光十二神将千百余年におよびて今なほ存せり（乃ちにして金堂に儼然たり又八角堂は武智麿の長男横佩右大臣豊成卿の造営にて造るは其後へ求聞持所の閼伽井は弘法大師密行修練の旧跡と云ふ前は吉野川の水流れて此所前後十二町の間四時常に舩筏の下りする所なれは面静かに世の人名をて為石川といふ（即吉野川の上なり）常に船筏の下りする蹤は地幽閑にして修禅に便あり故に高野大師の弘法をはじめ泰澄等の此に徳ここに遊び当寺の旧記に見えたり　大和志曰当寺は藤原氏南家緒太政大臣

八角堂　多宝塔　伽藍神祠　鐘楼　七層石浮図　僧院六宇　古鐘あり　銘以下に詳なり　又石燈籠あり　勒曰　弘安七年造立　又当寺の縁起　養老　天平　延喜　永延　元中　應永　等の綸旨宣符　数十章庫蔵す

古鐘　山城國深草道澄寺の鐘なり当寺に来りし時代詳ならず当寺の旧記に俗説あれども詳ならず序銘共に此所に道風の筆跡なりて好事の者これを義なる近頃模写の者世に行はる

道澄寺鐘銘并序　小野道風書。見鐘銘集及瀕草志等。右說字傳寫誤不少今所現在據鐘銘以訂之

道澄寺者。從三位守大納言兼右近衛大將行皇太子傳藤原朝臣。參議左大辯從四位上兼行勘解由長官播磨權守橘朝臣。為報四恩。濟六趣。合誠勠力所建立也。堂宇比甍。南北輪奐。尊像接座。前後跏趺。兩相公宿殖香火之緣。生為瓜葛之戚。非唯現世結契闊之情。然欲涉利共安養之樂。故各取其名首字以為此寺額題。所以貽本緣於來代。期同志於他生也。藤亞相。爰命鳧匠。乃鑄鴻鐘。且將令長夜昏迷。聞妙聲而知曉。苦海沉溺。驚梵吼而通津。延喜七年十一月三日。銘之。其詞云

倦師施治　菩提催緣　虛受必應　響高自傳
從夕至曉　出定入禪　傍唱衆聖　遙驚大仙
法喜增感　耶夢驚眠　遍阿鼻獄　達有頂天
刧數億萬　垂果三千　一音利益　無限無邊

道澄寺は東福寺法乃街道稲荷森より二町東の西側に道澄寺あり今浄土律の僧住持れ是其遺跡の旧址と又此より三町東に礎石ありこれぞ山城名勝志山州名跡志に見る旧址に詳ならず

栄山寺のあたり
ちか吉川よりの
宇智川にして
甚みなかれと
云間山よりなる
これは和須川ともいふ
綿くここに在る遠り
宇野の麓にて
吉野川に入

後阿陀墓 小嶋村榮山寺の北にあり 贈太政大臣正一位藤原武智麻呂の墓也 延喜諸陵式 續日本紀に見へたり

藤原長岡宅址 小嶋村にあり内麻呂第六子大同元年中のころ左衛門大尉より住し最武藝に長し 承和十三年従四位上に叙し宇智郡に隠居し嘉祥三年卒す年六十二歳

小島城 大和志曰天文年中別所友興こゝに居る

宇野親治宅址 宇野村にあり保元の役に日本大和國宇野七郎親治が勤役味方になりしといふ

龍池神祠 三在村にあり宇野両河内の氏神也

廃人墓 三在村の上方にあり 土人曰他戸王墓

月見寺 三在村にあり

王墓 須川村にあり由緒さだかならず荒墳也

楢井 近内村にあり

鳳凰寺 小和村にあり

高天岸野神社 北山村にあり岩野天女財天と称す

一尾背神社 北山村にあり今名を分神社と称す 延喜式名帳に出

觀音寺 岡村にあり

荒木神社 今井村荒木坂の池の東にあり今天神と称す 延喜式名帳に出

官幣霹靂神社 表久留野村にあり今雷神と称す

宇智神社 今井の安生寺村宇智川の東南にあり 延喜式 今國生明神と称す境内に安生寺あり

矢田畠笠辻 五條村より八町ばかり今井村にありむかし櫻井武者所成と云ふ人矢田寺の地蔵尊を信じ故に念ずる事ある時は矢田にまうでんとて櫻井の辺りにて地蔵来臨ましくて笠をかけ給ふ尊容を礼拝なりけんそれよりぞ御笠の辻と名付けしとぞいふ

御霊神祠 霊安寺村にあり五條村と共に氏神とす 井上皇后他戸親王の御憤つよく世の人おそれをなしけれは勅使をたてられまつりをなさしめ給ひて御霊明神と崇らる

本社中央御霊井上皇后 北早良親王 南他戸親王 三座 若宮一座 本地堂 唯脹観音 聖観音 千手観音 如意輪観音 弘法大師の御作也

霊安寺 御霊の社を守る寺なりしたかく名つけられ再興弥光院の御宇 正長元年の秋兵火にかゝりて神社佛堂本地仏の像も一時のうちにとられける此像秘佛なれど住侶も知ことなくありし表しも北畠准三后乃御霊の記録せしよりまふさにあらはしより本地観音の像を再営して安置し霊安寺うつくしび成就院

良峯寺 良峯村にあり

丹生川 其源吉野郡加名生谷より丹生谷を経て霊安寺村に至りて吉野川に入

丹生川神社 丹原村にあり今御霊と称し生子村と共に氏神とす

吉祥院 丹生村にあり正堂一宇 僧舎二宇

宇智陵 御山村にあり大和國宇智郡にあり 延喜式曰皇后井上内親王 續日本紀に見へたり

火雷神社 御山村にあり今雷神と称す

二見城 五條村の東吉野川岸にあり 元亀年中松倉重政居城を二見村に移す

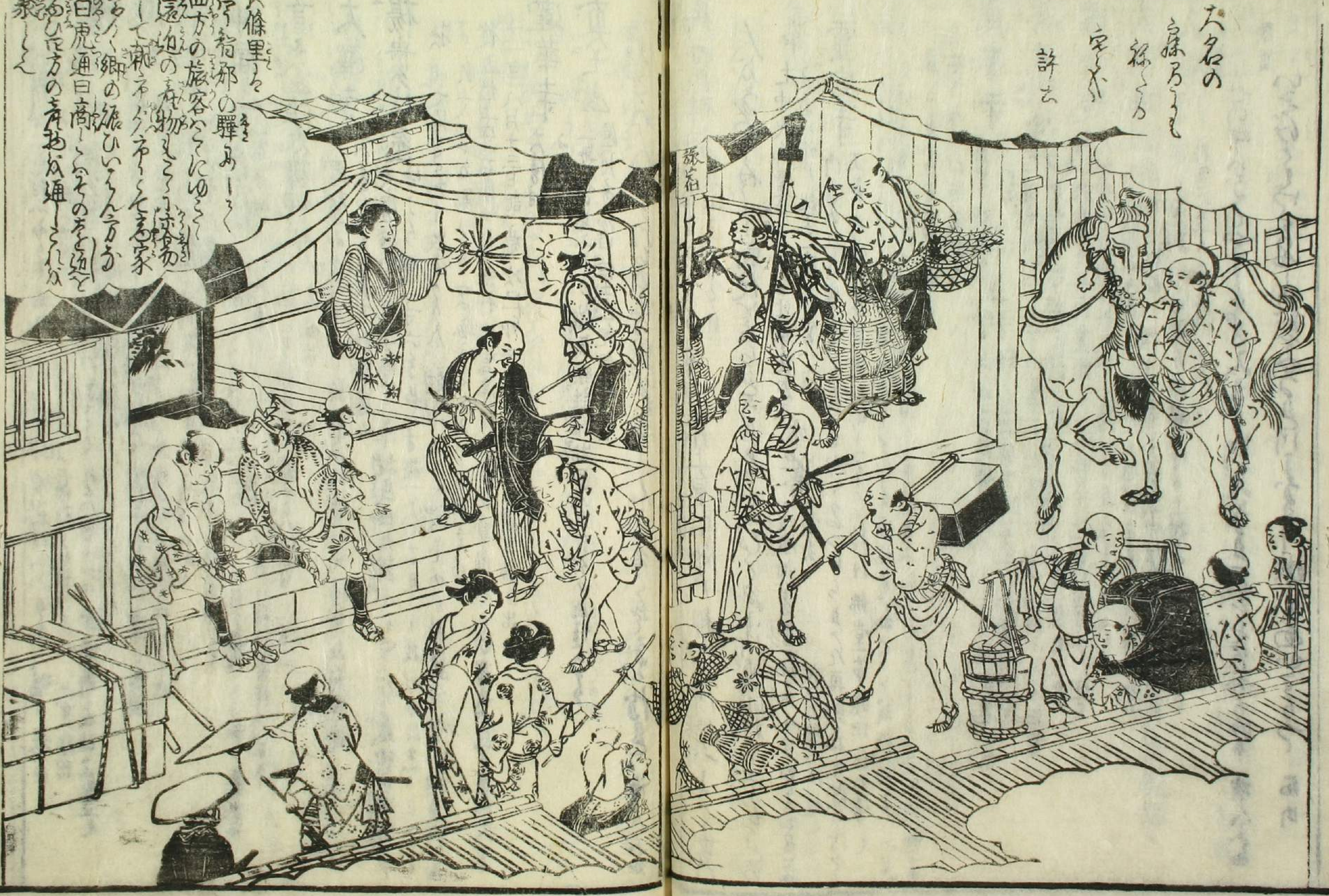
名澤川 舊名見瀬川といふ源は升福山より上村を經て新町に至りて吉野川に入

新勅撰

世の中によとやまとなるみゝ川みるみる物をさても有かな 讀人不知

顕昭

いそげどもつゐにわれすみなれし川をかなたて瀬もかはりつゝ


八條里にて
守有郷の驛あり
四方の旅客ここにゆきて
遠近の名物もここに交易
して朝夕市をなして商家
多く郷の繁ひいふ方なく
白虎通曰商とハその遠近を通し
四方の貨物を通ずるゆへ
聚しく
大名の
泉乃ミも
稀くり
定かな
許六

二見神社 二見村にあり今は両所と称す 神名帳出

統神祠 須恵村にあり今は八幡と称す 五條村と氏神なれども二代実録出

櫻井寺 須恵村にあり 統の神宮寺として天八幡宮中武者所康成の建立也

櫻井寺の傍にあり 統の鑑の銘の旗なるよしぞ 天文廿二年鋳造 梵鐘九尺竪五尺

中村坐神祠 下中村にあり所霊と称す 牧野荘八ヶ村の氏神とす

安井寺 下村にあり 常ごの什物に阿字毘陀羅あり

上村城 上ノ村にあり 牧野入道居城とす

神福山 大澤村にあり金剛山より続く 山勢高峻にして松杉蒼々たり

大澤川 この源大澤村より出て思ふに流る 吉野川へ入

高天山佐太雄神社 神福山の山頂にあり 俗に天狗嶽といふ 神名帳出

大澤寺 大澤村にあり神福山と號す 薬師堂一宇境内に琵琶池 大名石あり 真言修験道也

楊貴氏墓 大澤村にあり享保十三年村民田を耕すに 時に墓を得たり 中より瓦厚一寸六分長七寸横一尺の古瓦三十牧を出せり 按して全きは十牧ばかり今殺損して残るもの二牧 蓮華寺にあり什物 これは文字を彫りたり 字毎に朱を入たり 其文に曰

從五位上守右衛士督兼行中宮亮下道朝臣真備葬亡妣楊貴氏之墓 天平十一年八月十二日記 歳次己卯 と云 全文金石摸写圖に出す

蓮華寺 大澤村にあり

真土山 上野村の西にあり 催馬樂註秘抄曰大和紀伊の國境なり 澄月寺抄曰信土山紀伊國と云

拾遺

こゑ人なきまつちの山の郭公なきしんにたてこえるらむ　讀人不知

新古今

靜かなる人なれや待乳の山をあかりと称あり 抱なりいざよひの月　太上天皇

能宣朝臣大和赤土山にて女のりくるまに女のよめる

たのめこし人をまつちの山風にさ夜ふけしかば月もいりにき　知家

續古今

ゆくすゑのまつちの山の郭公くもちをしてや鳴かへるらん　大膳大夫

我せこがまつちの山の紅葉ゝのちるをかなしむ　源兼昌

新續古今

見せばやなまつちの山の名にしおはゞ人のあふ瀬の志るしあるらん　藤原爲氏

戸立山 南都紀行曰戸立山ハ堤のやうに長く續きたる山なり 戸なくしてはかなき名所之名高き大和國中と紀ノ内なりとかや 里人は紀州の名とあり

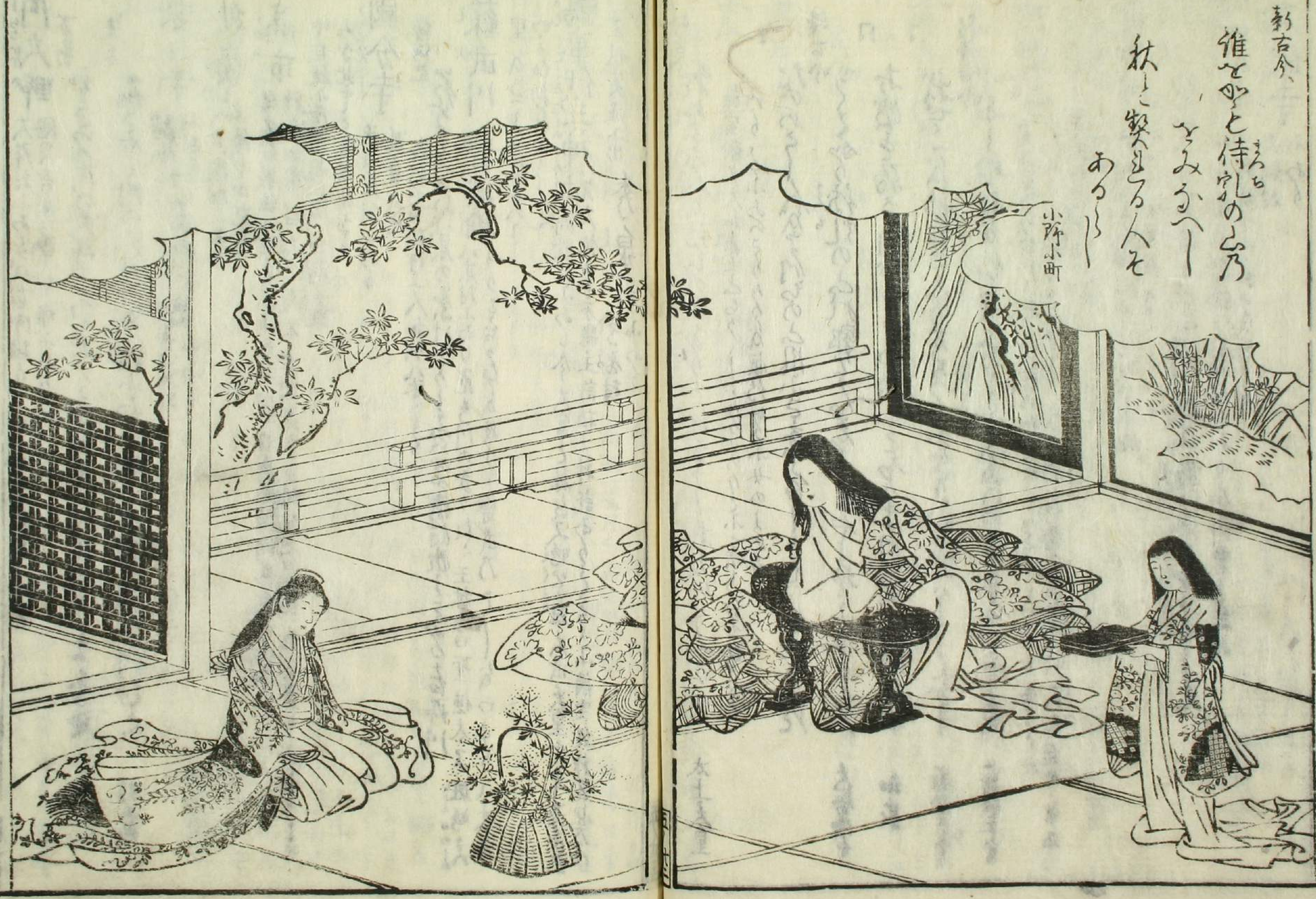
角田川 寄抄日大和國信土山のかたはらにありとぞ名所なりと云

万葉

白鳥の行人信土の山川に我馬難家恋しましも

落杉神社 在所不詳或曰黒馬村にあり今御霊と称す 近隣十三ヶ村の氏神とす

犬飼寺 犬飼村にあり


新古今、
誰をかも待乳の山乃
をみなへし
秋と契れる人そ
あるらし
小野小町

内大野 大野村にあり 八雲御抄には某に大和国と云云
澄月按に宇智郡にある也
万葉 玉きはる内の大野に馬なめてあさふますらんその草ふか野
夫木 霜さゆる内の大野の冬枯にあさぬすませり駒なつむらし　行家

安日寺 表野村にあり

吉野川波 大網村にあり

榛嶺山 大深村にあり 続日本紀出

高市 倭名類聚鈔曰國府高市郡にあり日本紀神代巻曰天高市 神名秘書に曰天之高市大宮是なり 略説之曰日往郡に建るゆへ新るなり 中臣祓に所謂高日國二日高見國 みな此ところを指なり

國分寺 八木村にあり 延喜式出

倭名記 花のちる七曲河上人和歌集
花ちりてみな八木の岸もみな浪に流るる吉野川

蘇武川 曽武橋 八木村にあり飛鳥川のかかりし王林抄曰聖徳太子斑鳩宮よりたちはなの宮へかよひ給ふ道に曽武乃橋ありといへり八木乃
里なるくく橋なり

鴨事代主神社 高殿村にあり今大宮と称す又鴨公森 天武天皇元年高市縣主許梅に神託ありてより小領坐久神名帳乃比
三代実録に出

秀泉井 ○○村にあり

鷺栖神社 四分村にあり今鷺栖八幡と称す又迎讃大寺村の氏神とし神名帳出 王林抄曰藤原宮へ鷺栖坂の北に梅に鷺栖の地名今に存

菜原井 四分村にあり

慶薬師寺 木殿村にあり礎石存す天武天皇の建立後平城の右京にうつす

田中宮 田中村にありむかし舒明天皇皇居しるし給ふなり

馬立伊勢部田中神祠 田中村にあり今八幡と称す二ヶ村の氏神とす 三代実録出

石川慶精舎 石川村にあり明てひ石塔あり是その古址なり 人皇三十一代敏達天皇十三年九月百済国より弥勒の石佛一軀を貢ぐ蘇我馬子これをうけたまはりて播磨国の高麗の恵便法師を法の師として司馬達等が女嶋を得度せしめ善信尼とし禅蔵尼恵善尼の三人に佛をうやまはしむ馬子の宅に佛殿をつくりて仏舎利現しけるを馬子鉄鎚をもつてうちしかども砕けず又水に入れども沈まず 馬子が宅の東に仏殿をつくりて此舎利をおさめ 石川の宅に仏殿をつくりしより仏法の始りとす
日本紀

孝元天皇陵 石川村にあり字中山塚といへり剣池嶋上陵といへり陵考曰陵高一丈根廻三十二間嶋廻三百片有

田身池 和田村にあり 多能武池ともかけり
夫木 下つもえぐく川やつくさんりその名むの池におふる菖蒲を　隆時

大野丘塔 和田村にあり礎石存す蘇我馬子ここに大塔を建て大斉会をなし後に石川精舎にひに塔を守屋大連焼拂ひ給ふなり

廢大官大寺 小山村に礎石あり俗に講堂といふ其めぐりはかくべつ大なり又塔の礎よりは小なり其礎石の径一丈八尺柱口二尺五寸なり

どの石ようのつくりの

豊浦沈 豊浦村にあり

甘樫坐神社 豊浦村にあり今推古天皇と称す神名帳に出

味橿丘 豊浦村にあり皇極天皇三年蘇我入鹿家を起す

允恭天皇四年氏姓の乱れ真偽を定めんとて盟神探湯をさせたまふ勅宣ありし所なり甘橿丘に神を祭り熱湯をわかせ氏姓の人々湯浴斎戒して味橿丘にいたりそのいはく本姓を強なくば釜にのぞみて熱湯を探るべし真なる者は身つくろふことなくそこなふなしなり偽ある人は焼ただれてみだりなりと定めける後世の帝も世々本系を図書寮に納め給ふ又弘仁私記大書等の證書に

本朝湯起請の初にやあらん 日本紀

廣嚴寺 豊浦村にあり又向原寺に作る又の名豊浦寺といふ傍に井あり櫻井といふ又の名榎葉井といふ 人皇三十代欽明天皇十三年十月百済国の聖明王金銅の釈迦像一軀幡蓋経論若干巻を帝に献りける其時群臣に奏して曰く我国天下の社稷の百八十神をまつりたまふ今改めて他国の神を崇めたまはば国神の怒をいたさんとて蘇我稲目に仏を給ひて小墾田の家に安置し向原の家を寺とせしが疫病ありて物部の守屋大連寺を焼き仏像を難波の堀江に捨てられしを三代格に曰元興寺は仏法元興の場聖教最初の地なりといへり

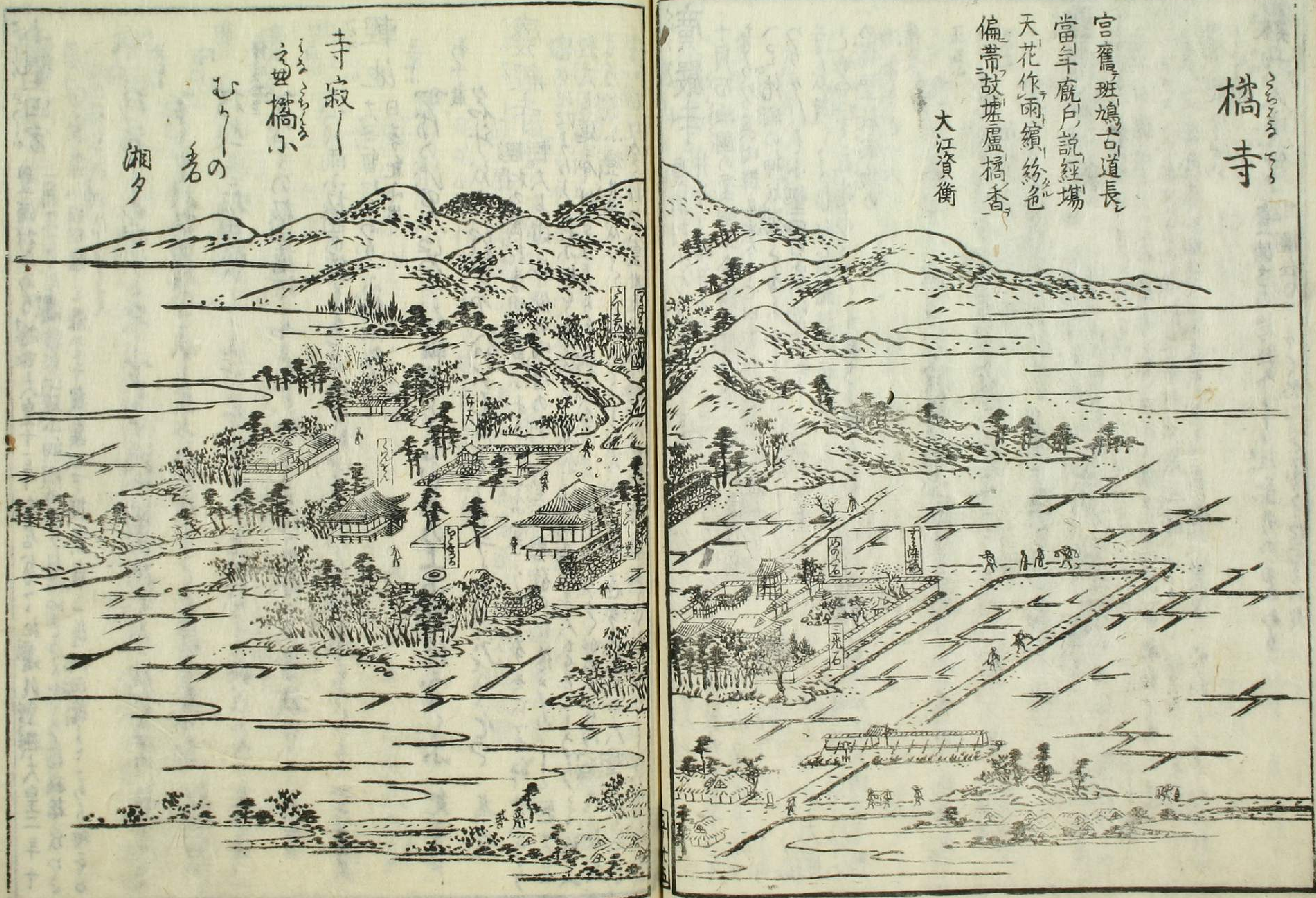
続古今 かつらぎや豊浦の寺の秋の月西に成行そらぞ見えける 源具氏

王葉 すゑ入れて名残の花もちりぬらんそのかみの寺の入相の空 入道前太政大臣

夫木 かつらぎや豊浦の寺の西なる榎葉井に白玉しづく

難波堀江 王林抄に曰豊浦寺の東北仏門の西にあり今は小さき遺れて難波堀江は守屋大連堂塔を焼仏像を堀江に捨し所といふ又難波江とも云浦といふは昔は広くして海に通じたるにや又豊浦の名も是より出たるなり又法隆寺の縁起に摂津国難波浦に沈しとあり大和国難波江必定なり仏像を捨られたるといふにはいづれの説か是ならん

管見記 蘇我入鹿第 豊浦寺の北にあり甘橿丘の内にありけりしといふ 榎葉井の東にあり


橘寺
宮旧班鳩古道長
当年厩戸説経場
天花作雨繽紛色
偏帯故墟盧橘香
大江資衡
寺寂し
高畠橘に
むかしの香
湘夕

小墾田宮

豊浦村にあり 推古天皇十一年皇居なりしに遷れ給ふ 舒明天皇二年十二月又こゝに遷移し給ふ 此辺に細川のながれにわたせる橋を板橋なりとも 万葉集に坂田橋と詠て千載集以下撰集載る所板田橋とよめり 小坂田橋なりといふ

千載
ふみ見てもあるかくみえしをそれはれて田の橋も今渡るなり　法橋奉覚

玉葉
をとにきく板田の橋のこぼれなばいかみなおもしてし渡る君かな　前大僧正慈信法師 又名親寛上人

同
打わたす板田の橋のたえしよりくものかよひぢ人もわたさず　二条院讃岐

続後拾遺
こよひの板田の橋のことゆかばかよはせむゆゑ人ゆき我せこ　人麿

同
五月雨に板田の橋もうかくれてけるありけん道ぞふみまよふなし　加茂基久

軽池

大軽村にあり 一に軽ノ池 日本紀に出

玉葉
かるの池の入江のみぎはの鴨もそこも上に羽根ならべくに　紀皇女

新千載
名にしおへの鴨の戸人なりとしらぬ年もへぬなればそで　為定

厩坂寺

軽村の属村東明寺邑にあり 今は堂にして本尊は薬師如来なり 軽大臣遣唐使の時唐の則天皇后の命により燈台鬼とされて 大臣の子弼宰相入唐して父をたづね 燈台鬼となりしを見て悲しみ 大臣乃涙を流し燈台鬼となりて 皇卅五代舒明天皇の御宇なりしが 卅六代皇極帝の時かの大臣の息宰相光遣唐使となりし時 燈台鬼をみて父となりけるやいかにと問ひしに 燈台鬼涙を流しつゝ指を咋切り血を以て詩句をかきしるしける

我元日本華京客　汝是一家同姓人
為子為爺前世契　隔山隔海恋情辛
経年流涙蓬蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼　争帰旧里寄此身

燈の影かしたる身をかへしても子なる人をよるべかしけて

或曰 此る後人の所作にして忘談なりといへども既に下学集及び林社啓蒙にもしるしたれば 其出所を軽大臣なりと此時の人いひつる国史諸実録に所見なし

曲峡宮

以上軽の御神天町をかぎり小田地の字に残れり わさゝの行宮といふ 懿徳天皇都なり 軽の地に遷都と日本紀に見えたり

境原宮

軽の西に大井の祠あり 是所なるべしといへり 孝元天皇四年都を軽の地に遷すと日本紀に見えたり

豊明宮

応神天皇元年都を軽の地に遷し是を豊明宮といふ 日本紀に見えたり 旧址不詳

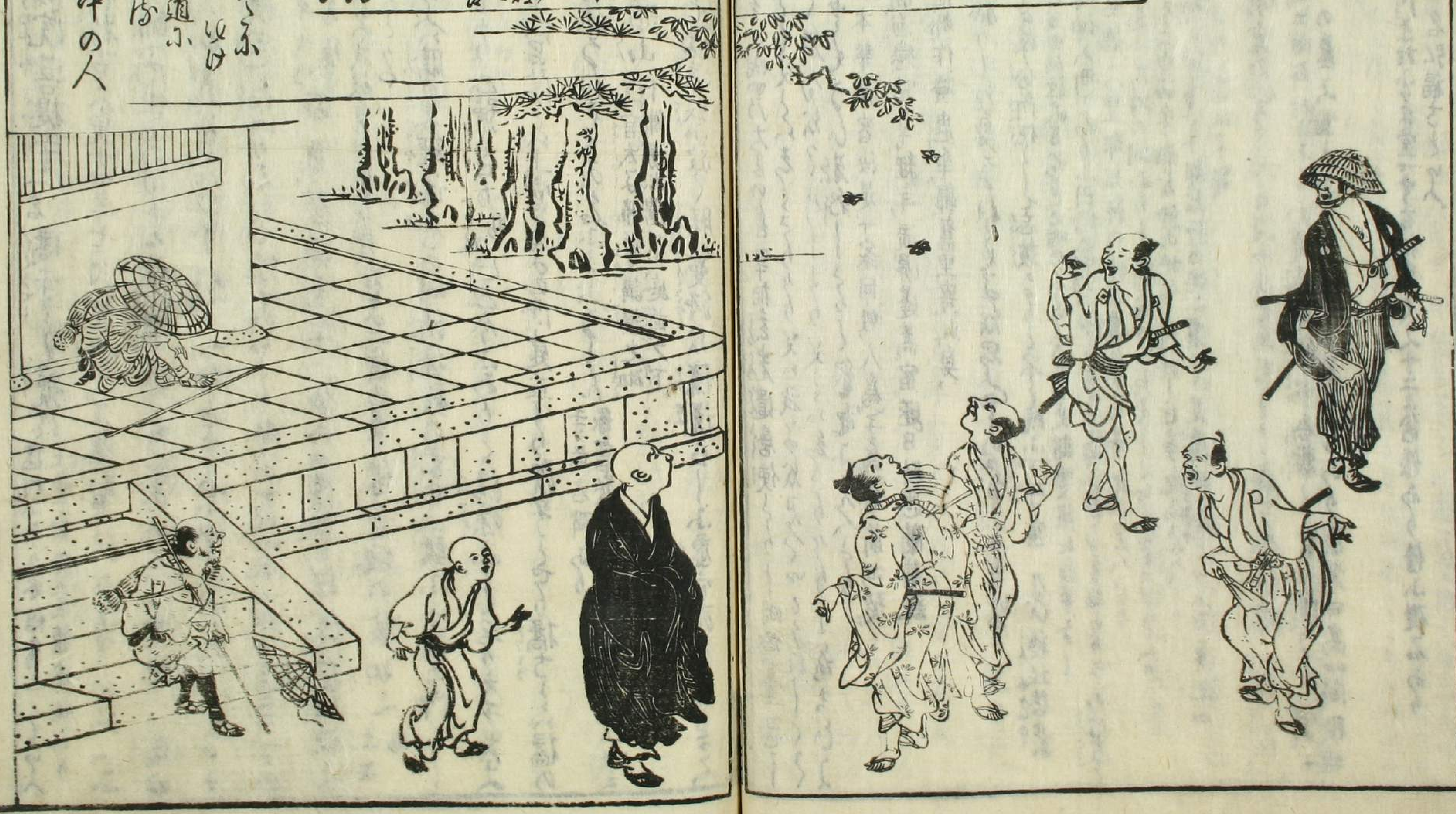
檜隈大内陵

新撰姓氏
軽島の明宮のむかしをそれてし唐人乃池

五条野村にあり 天武帝持統帝合葬し奉る陵なり 字を大内山といふ 石槨二つあり 陵考曰高四間根廻九十五間 廻り八十八間

厩川原寺

川原村にあり 堂一宇 古仏の二天及び十二天の像あり 傍に礎石あり 一名弘福寺といふ



菩提寺縁起曰
楢ちの南方より
金色の蝶とびま
ゐく講堂の柱に
那らちゆくほどに
忽ちにして飛さりぬ
そのあとを見れはたゞ
一首の和歌を留
付たり

新古今
菩提寺の講堂の
はしらにむしのくひ
たる歌

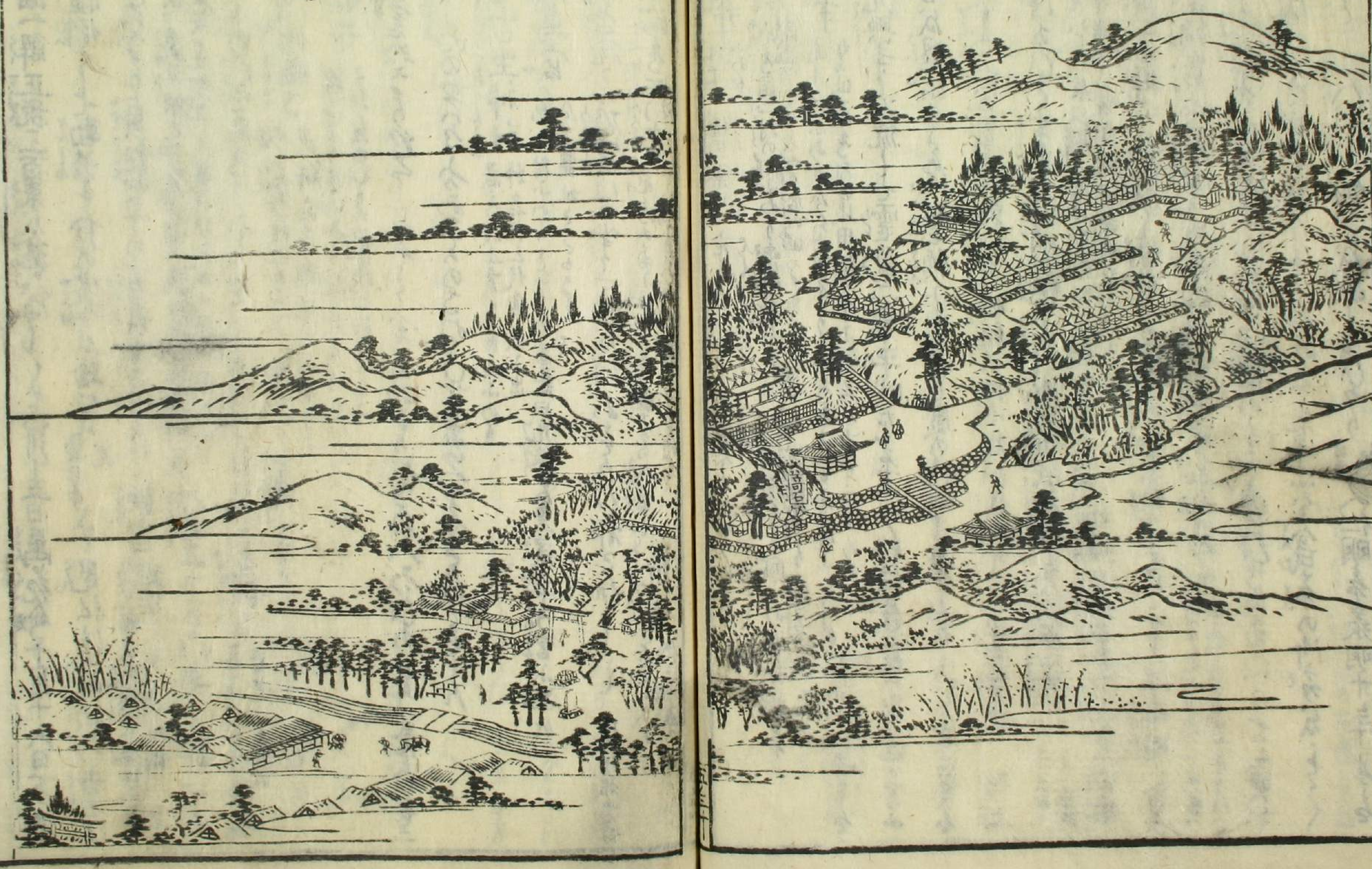
しるへある時にたに
ゆけ
極楽の道に
まとへる
世中の人

佛頭山上宮院菩提寺　一名橋寺とも號く　橘村にあり安倍島山ともいふ
人皇三十四代推古天皇十四年七月聖徳太子勝鬘經を講せさせ給ふに
塵尾をとり師子の座にのぼりたまひしかば天より家のかくつ花ふりて諸の
名僧大徳其妙義をかんじてまれなる事とせしにいたしあかつきにあふの人より
請とつるの夜蓮花ふりみちて地にみちたり其の花ひとつさしして三つの人
ありとかや　名蹟　平氏傳　本尊聖徳太子十六歳の遺像を法空上人の作つて
げる時代の人とかや　此上人は久我殿息持明院殿の　太子二歳の尊像は日域の最初之　玉林抄
佛頭山とは太子勝鬘經講讃の時清涼殿の前の山頭に千佛の御くし
出現ありしより山號とせり　玉林抄　此山今にありて清涼山ともいふ千四百余人
さかりし又上宮院とは上宮太子の御建立より院号とせり橋寺とは橋の
邦の皇居の地なればその名によぶなるべし　寺前石碑あり　傳ニ曰弘法大師一丈餘の碑を立る也云云
其銘曰　佛頭山　上宮太子勝鬘講讃之地　千佛湧出蓮華庭前之下
當山縁起曰　太子は勅して清涼殿に於て勝鬘經を講説ましまし虚空に音楽きこえ

異香四方に薫ぜられ山には千佛の面貌光明赫奕として現じたまふ
天皇奇異のおもひをなし叡感のあまり則此所に東西八町南北六
町金堂講堂食堂五重塔經藏鐘樓中門惣門六十六坊の僧坊を
なみかけ我朝第一の伽藍を建営し給ふ太子曰日本の霊鷲山は是
なりけふより一段のおもひをこふ極楽に往生せん御願を首あり
佛生の花の道場の有けるに太子此國と名付給ふよし
有難き法のおこりし地に落てありしとあるは橋乃寺
畝割塚　太子七歳の御時百濟國より諸識人を御招きありて寺塔を建立し給ひ田地を
三百六十歩に割せられ又十分一として二十六坊を石にしるし本朝にはじめて田畑の
法にありしは此畝割の事をしめしたまふ又勝鬘經義疏の金堂の下に
納らるる事は此所に埋めたまふゆへに畝割塚ともいふ又同年十六
毎日公示しめ人本朝六毎日のそしありけり
春井　此ちかくより二つの井あり是太子御誕生の時いふ本に春井南に
ある井は今にありて冬井の二つの井は此の所にありて赤染の井あり湯つきてはゆくへなし
古鐘　勅日建治四年泉州大鳥郡　石燈爐　時代不詳古代の相形うつくし
深井村居縁寺鋳　絶品なり

拾芥抄曰菩提寺又橘寺と號し志度の道場上西海人々これを建立をとなへ
八雲御抄曰勅撰名所なとに橘寺は河内國と云はかりに班鳩宮のちかき道場なり
あまりにたくさんとよりなん
夫木
大和國をめぐりしにかくて
班鳩の宮の古道ちかくなれば人ぞ橘寺の花乃下風
性霊集曰淳和帝の御時に故中務卿親王の御爲に薬師如来日月遍照两士を成御建立ありしに金文の蓮華法曼陀羅書写の功をとげたまひし大長四年九月に橘寺に安置しをはりぬ云々
御願文の詞に見えたり
厩坂 所不詳應神天皇十五年八月百済國より渡りし馬二疋を輕の坂上の厩にて飼しむゆへに其所を厩坂といふ
厩坂宮 所不詳日本紀に見えたり舒明帝の行宮なり
厩坂池 所不詳日本紀に見えたり厩坂もそこなるべし山科にありとも
神名備山 飛鳥村にあり 神岳 真神原 淺小竹原 いづれもみな此あたりなり
玉葉
みむろ山ゆふかけて祭る神なびの山の岩根の花の色に
澄月
飛鳥風をさそひて今朝見れば真神か原に雪ぞふりつつ
家隆
飛鳥坐神社 飛鳥村にあり神名帳に出四座合殿小祠五十餘所又酒殿社あり大石あり縦一丈五尺横五尺石面に槽七道あり影刻にて石の方に其上に
沃酒をなしぬ 本社四座 事代主神 高照光神 建御名方神 下照姫命 中社二座 素盞烏尊 大巳貴神
奥社二座 天照大神宮 豊氣太神宮 末社 八十座
飛鳥井 社前にあり 催馬樂曰 飛鳥井にやどりはすべしかげもよし みもひもさむし みまくさもよし
板蓋宮 飛鳥岡二村の間にあり皇極帝の皇居の跡なり 川原宮 板蓋宮の南にあり齊明帝これに遷居の跡なり
飛鳥寺 舊名址 飛鳥村の北田畑の中に礎石九十許あり 飛鳥村にあり今は安居院と號す號は法興寺と號し又元興寺ともいふ本尊は
一名元興寺と號して靈亀二年平城に京にうつり藍は聖德太子
守屋を退治の時御誓願ありし十七歳の御時建立したまふ本尊は
釋迦如来丈六の尊像鞍作鳥佛師の作也初は此處仏の為に高麗國大興王
つかはしける黄金三百両を献せられ遂に佛成就しけれは光銘曰 推古十六天皇十三年歳次
乙巳四月八日戊辰以銅二萬三千貳百斤金七百五十九兩敬造釋迦丈六像銅繡並挾侍等云云 初往ハ高麗の慧慈百済
の慧聡此寺に住す後は安居にてこれを安居院ともいふ後齊明天皇
三年に須弥山の形を寺の西に作りて盂蘭盆會あり 日本紀に見えたり是本朝盂蘭盆會の始なり
天武帝六年に一切経を讀誦ありし帝は寺の南門に出て三寶を
禮拝せられし珍寶を施入せらる 持統帝元年に天武帝の御為に
袈裟一領を施入ありし 日本紀 又仁明帝嘉明十年

飛鳥社（あすかのやしろ）



燈油一斛正税二百束を施入ありて六月十五日萬花会十月十八日下燈会恒例として勅使を立られ宣下を給へる 続日本紀 是仏法最初乃寺とよ

ゆゑたるか貞観四年の官符に書せられし詞に曰 此寺佛法元興之場聖教最初之地也故和銅三年帝都遷平城之日諸寺随移件寺獨留朝庭更造新寺備其不移間所謂本元興寺是也 三代格 往昔四方の門毎に額あり

ひがしの門に飛鳥寺とし南の門に元興寺 西南の両寺今安居院に属す

北の門に法満寺 京洛西本願寺の末派なり 今飛鳥村にありて真宗の道場となる

安居井 橋寺より艮にあり井泉ありて これをのむ人の諸病を除くといふ

続後拾遺

ふるさとはなりてそしてあすかのあすかのてらの入あひの鐘 式部卿親王

堀河二条百首

ひとの世へたるあすかのさとのつぼすみれつみにきつらん人はたれそも

飛鳥坐神社 飛鳥村上方鳥形山にあり 神名帳三代実録に出 古事記曰允恭天皇遠飛鳥宮に坐して

遠飛鳥宮 今舊址さだかならず

新続古今

いにしへの旅枕せしあすか川おとこの乃都とひしも 権大僧都公好

飛鳥河原行宮 飛鳥村の東に址あり孝徳帝の行宮なり 此傍に井あり河原井といふ

荒墳 飛鳥村にあり 俗に入鹿の塚といふ

飛鳥川 水源は畑の山中より出て稲淵を経て細川に合し岡飛鳥に至り今井に至り蘇我川といひ北流して廣瀬郡に入

古今

きのふといひけふとくらしてあすか川流れてはやき月日なりけり 春道列樹

同

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる よみ人しらず

後撰

渕は瀬になりかはるてふ飛鳥川わたりみてこそしるべかりけれ 王京元方

拾遺

飛鳥川しがらみ渡しせかませば流るる水ものどけからまし 人丸

続拾遺

渕やさは瀬にはなりけるあすか川浅きを深くなす世なりせば 平深養父

新古今

あすか川もみぢ葉ながる葛城のやまの秋風ふきぞしくらし 人麿

同

飛鳥川せぜに浪よるくれなゐや葛城山の木枯の風 権中納言長方

同

飛鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えずかもあらん 元明天皇

続古今

あすかの川ゆく瀬の波にみそぎして早くぞ年の半ば過ぎぬる 定家

同

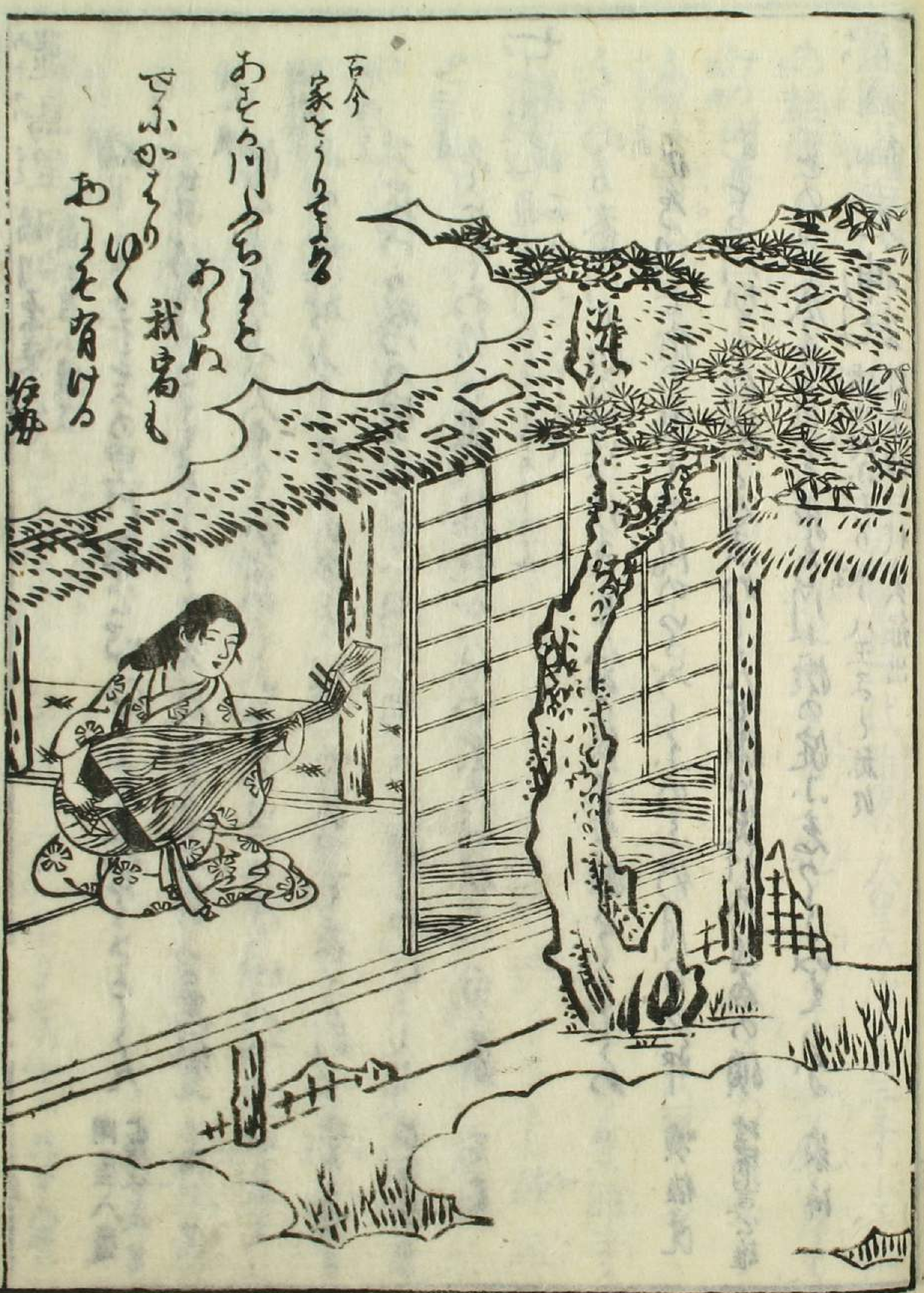
年ふればいかにかはらん飛鳥川さだめなき世ぞ思ひしらるる 入道前太政大臣

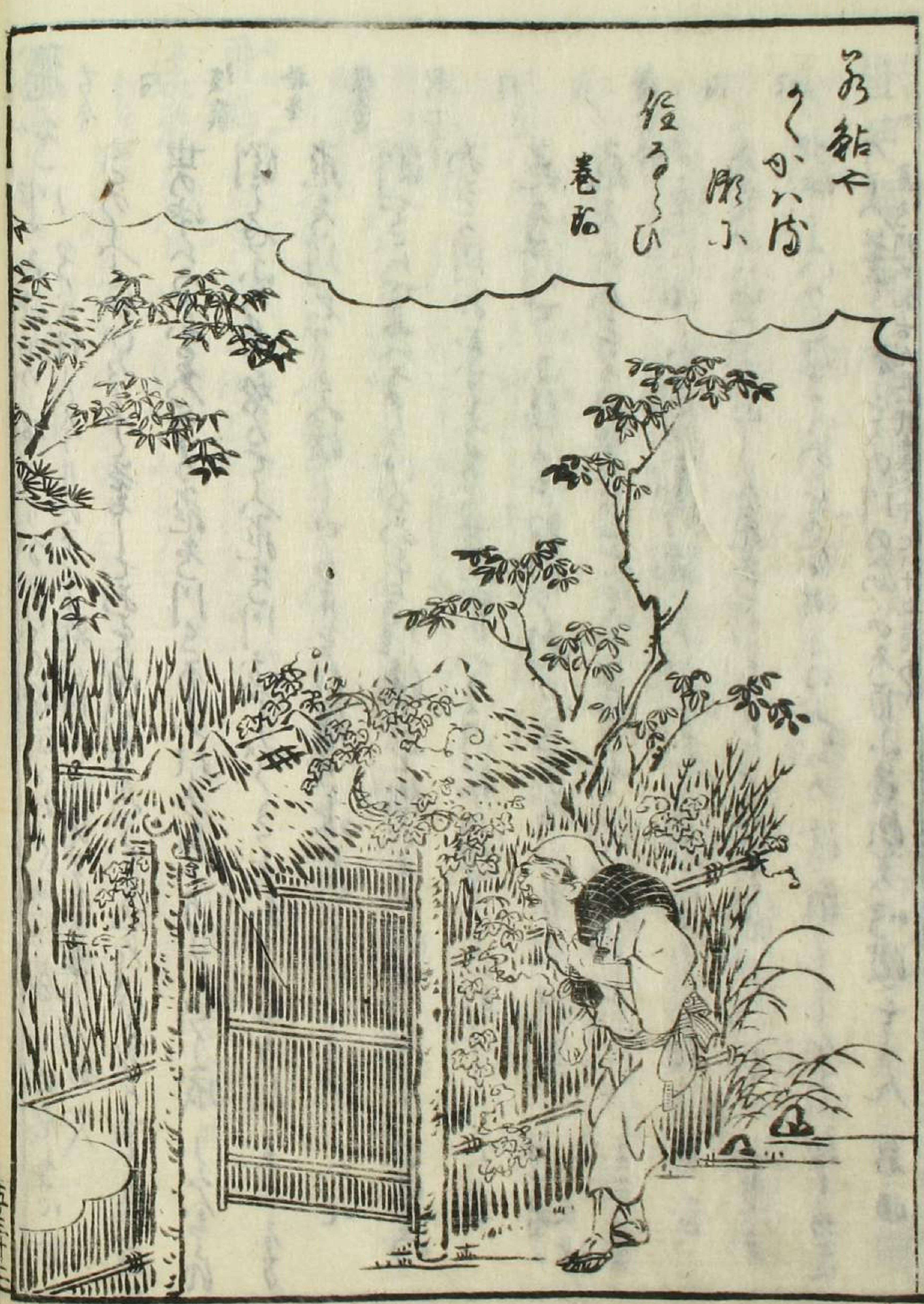
同

世の中はいかにせんとかあすか川かはる淵瀬の浅瀬しらしかさ 従二位頼氏

たれ人かあすかの川の流れより昨日今日ともあはれとか見む 紀貫之

飛鳥川の和哥九代集の中に六十五首あり


古今
家をうりてよめる
あすか川ふちにもあらぬ
わか宿も
せにかはりゆく
ものにそ有ける
伊勢


第十
くかいは
咲ふ
絵あるゝひ
巻哉

飛鳥里（あすかのさと） 橋川原東也 雷土名に寄す

続古今
ぬしゝらぬあすかの里に郭公なきてくりゆきうなくらん　岡屋入道摂政太政大臣

玉葉
あすか井にかげさしもきこえねどまだかよひける名の里は空　土御門院

続千載
ゆふぐれはたえず人めのあすか風里に待はる人へさ　従三位兼氏

続拾遺
あすか風神さびてふる夜半の雲なかれてみこの里も衣うつ之　従三位兼房朝臣

新続古今
苔枕のかよひのほかにそらつかさ乃都あとひしも　従三位藤原為家

十五番哥合
冬がれてあすかの里の旅枕おもひてやすらむ秋乃白露　定家

七瀬淀（なゝせのよど） 龍田川のながれなり

後撰
ゆく香川七瀬の淀に侫るもしるらむ我おもひそ波にさゝめ　読人しらず

散木奇歌集
龍田川七瀬の淀に吹風のいづくに行かも月日の姫　順徳院

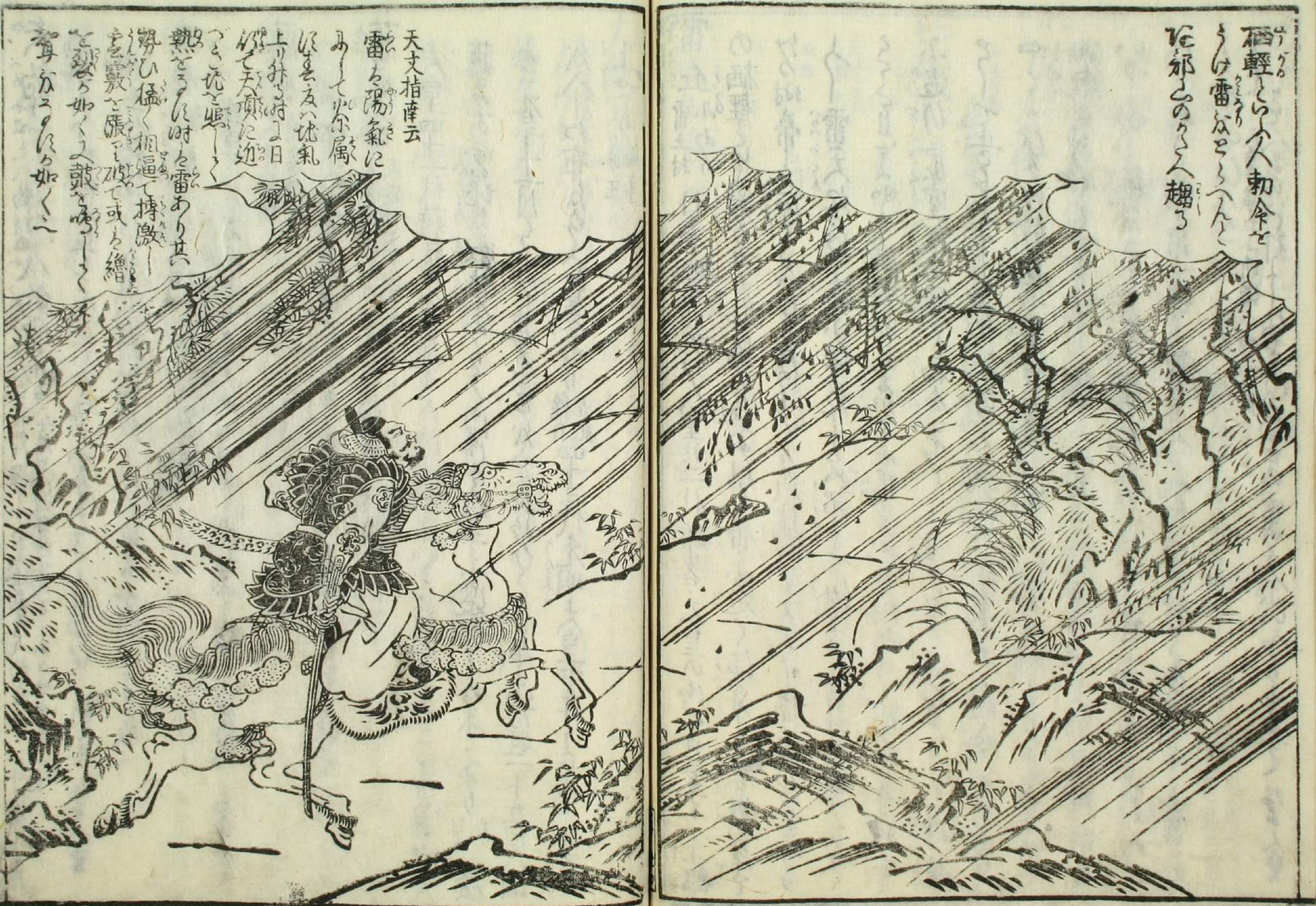
風雅
あすか川ひとつ瀬の成ゆらん七瀬の淀の月夜の頃　権大納言公雄

壬二
まつの目も今宵ぞ龍田川七瀬の淀に志らしもみぢかな　家隆

大國御蔦神社（おほくにみとりのかみのやしろ） 雷土村にあり 今八王子と称る 神名帳 三代実録出

雷丘（いかつちのをか） 雷土村にあり 日本霊異記曰 人皇廿二代雄略天皇の御宇七年に小子部の栖軽といへるものあり 肺脯の臣なれバ帝に近く侍りし大安殿に寝ましけるとき帝と后とむつびおはしましけれバ栖軽もえしらず猶縁にゐけるおりから雷天になりけれバ帝栖軽に詔して汝よく雷神を請しまゐらせよとありけれバ栖軽勅命を蒙りて馬に乗りて阿部の山田より豊浦寺へ赴き虚空に向ひ白眼て勅命ぞと呼かけて馳ゆきしに磅礴として止る所をしらず我朝の虚空より勅命をきゝて落かゝり豊浦里と飯岡の間にして雷神を将て栖軽これを輿にのせて帝に奏しければ雷光殿舎をかゞやかしけれバ帝もおそれ給ひて幣帛を供し本の所におくらせ給ふ其所を今に雷丘といひけるとぞ

万葉 天皇雷丘に御遊の時によみ給ひける
おほきみは神にしませば天雲の雷のうへにいほりせるかも　柿本人麿


栖軽といふ人勅令を
うけ雷をとらへんと
阿部山のかたへ趣く
天文指南云
雷ハ陽氣にして火に属
ゆゑに夏ハ地氣
上り升る時ハ日
影て天頂に近
づく故に鳴しく
熱きときハ雷あり其ハ
勢ひ猛く相逼て搏激し
玄竅を張て破て或ハ繒
を裂か如く又鼓を鳴しく
聲かまびすしき如くへ

矢釣山 上八釣村の上方にあり 八釣宮 人皇廿四代顕宗天皇遊苑考八釣宮にて即位ましまし 紀 明年三月上巳の日曲水のえんをしめさせ給ふ 正統記

万葉 矢釣山木立も見えすふりまかふ雪にさはける朝たのしも 柿本人麿

同 矢釣川のみなそこたえす行水のつきてそ恋ふるこの年ころを

大原 八釣村にあり 所伝

荒墳 大原村にあり 藤原夫人 天武天皇の夫人藤原氏祖先の墓

万葉 我里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくはのち 天武天皇

藤原 大原同所 異名なり

万葉 藤原のふりにし里の秋萩はさきてちりにき君まちかねて

藤原宮 大原村にあり 此年御造営ありし 大職冠の大宮址なり

人皇四十一代持統天皇飛鳥の浄御原にいます時はしめて藤原の宮地を叡覧ありて同八年に遷都したまへり 日本紀

慶雲元年十一月はしめて藤原宮の定めを給ひて宮中に百姓一千五百五烟を入しめて布を給へり 続日本紀 四十三代元明天皇四年より藤原宮を上せり 帝王編年

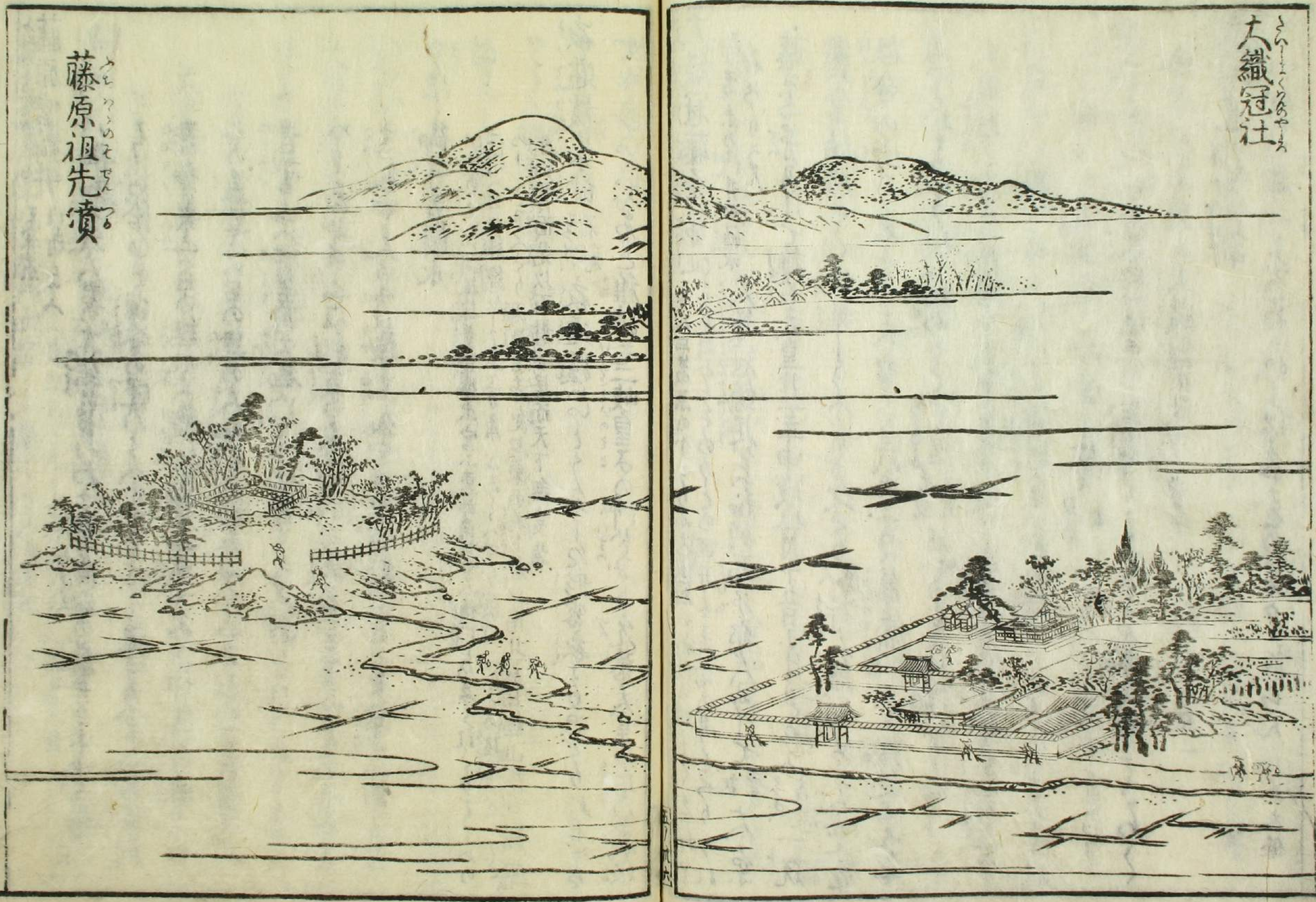
大職冠藤原鎌足公誕生址 土人曰藤原のかたはらに大職冠の誕生の地といふ所あり そのもとの埋井を産湯の井といへり 即藤原の御井の清水なりとかや

大織冠鎌足公は和州高市郡の人にして 釈書 大原藤原の第にして推古天皇廿二年甲戌八月十五日に生れ給ふ 多武峰略記 一説 常陸国にして出誕ありしともいへり 大織冠は大児屋根命の御すゑなり 天智天皇八年十月藤原の内大臣鎌足公やみ給ひしかは天皇みつからおもむかれて勅ありて東宮 天武天皇 をつかはし大織冠と大臣の位階とを藤原氏をそ賜りける 其明日薨す 五十六歳 一説五十 大織冠は正一位の冠なり 日本紀 一説五十四歳にて薨し給ふとも

法光寺 旧址不詳 拾芥抄曰法光寺は中臣のもとの寺なり 藤原寺ともいへり大織冠の氏寺なり

藤井原 藤原御井と同所今不詳

古歌 藤原の藤井か原の花の色をつけておきてまし君もこそみれ 第九


大織冠社
藤原祖先墳

藤原宮御井 旧跡といふ 藤井原

万葉に 八隅知之我大君の高照す日の皇子のわかみさ麁妙の藤井か原に大御門

はじめ給ひて埴安の堤の上にありたゝし見し給へば

青香具山ハ日の経の大御門に春の山と繁さびたてり畝火の

この美豆山ハ日の緯の大御門に美豆山と山さびいます耳成の

青菅山ハ背友の大御門によろしなへ神さびたてり名ぐはしき

吉野の山は影友の大御門に雲居にぞとほくありける

高知や天の御蔭天知や日の御蔭の水こそハ常にあらめ

御井の清水

此歌のこゝろハ詞林採葉曰藤原宮に東西南北の大御門あるよしなり 二門ハ日の経緯によりて二方角をあらはせり 後の二門紀の陰陽にしたがへり 周礼考工記以東西為日經以南北為日緯山陽曰影陰曰背面是以百姓安居而天下無疆焉

衣通姫家地 在所不詳 衣通姫ハいとうるはしき形容なりしをとりめでたまふ

稚渟毛二岐皇子の御女なり允恭天皇の后忍坂

割 大中姫の御いもうとにておはしけるを天皇衣通姫をめし給ひしかど

かたくも姉君のこゝろをはゞかりてまゐり給はざりしを御使たびたびにおよび七たび

まゐらせ給ひ後舎人中臣烏賊津使主に詔ありていつはり衣通姫の

はゞかりをときまゐらせよとのたまひければ使主はかしこまりて罷にいたり

家にいたりてひきゐて庭の内に伏て七日にいたるまで衣通姫

いなびがたくはべりて来り給ひしかバ藤原に殿屋をたてゝおかせ給ふ

天皇藤原にわたらせ給ひて衣通姫の消息をきこしめすにひめ天皇を恋たてまつりて

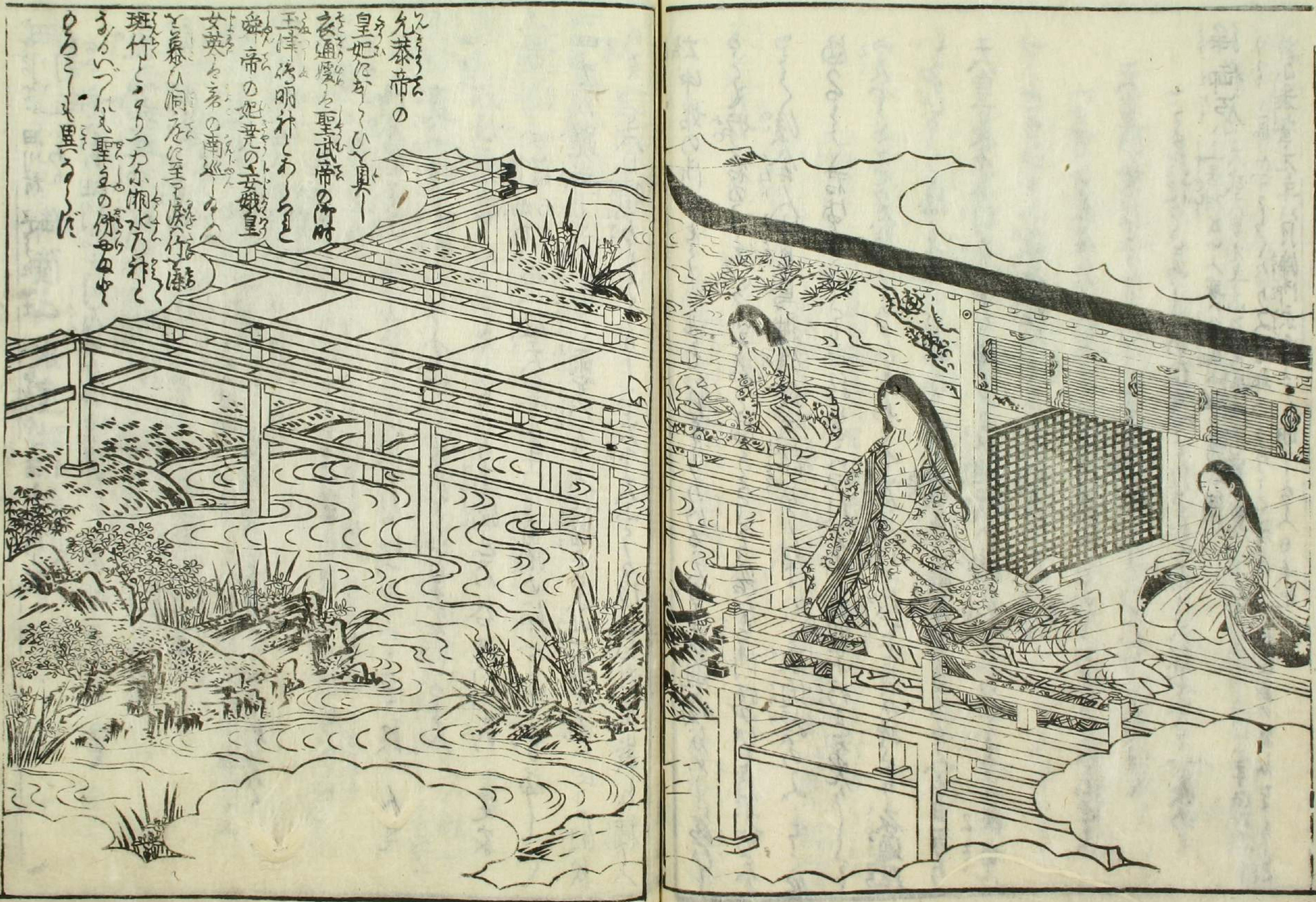
ひとりゐ給ひし時衣通姫ひとり君待がほにて 日本紀

わがせこが来べきよひなりさゝがにのくものおこなひこよひしるしも

天皇此歌をきこしめしてより御心にいたくあはれとおぼしけり

されどきさきのひめをそねみ給ひしかば…

浄御原 上居村にあり或ハ浄御に作る旧名細川 天武天皇元年に飛鳥浄御原宮と號しうつり給ふ しばらく御位まします後又遷都あり 委しくは群臣より佐渡國の圖に 綏靖天皇元年八月浄御原宮に崩しかハ 日本紀


元恭帝の
皇妃におゝひと申し
衣通姫たる聖武帝の御時
玉津島明神とあらはれ
舜帝の妃堯の女娥皇
女英ハ舜の南巡しゆへ
を慕ひ洞庭に至て涙竹に灑き
斑竹となりつひに湘水乃神と
なるいづれも聖主の御母なれど
ゆゑこゝに異るらん

細川山 細川村にあり 御陵山 氷室址 共に細川山の内なり

夫木 衣笠内府
南淵の細川山を時雨るゝはゆみの上に今さかりなり

氣都和既神社 上村茂古杜にあり 傍に瀑布あり高さ二丈ばかり
細川 上居 尾曽の三村氏神なり共にあり

淺茅原 小曽根村にあり 桃樹繁殖し花の盛りは美観なり 氷室址 小曽根の上方にあり

滑谷岡陵 舒明帝滑谷岡に葬りて其後押坂内山に遷すと日本紀にあり 冬野村のかみに優婆塞の古墳とて有 俗に谷といふ

大仁保祠 入谷村にあり 今春日と称す 三代実録出

南淵山 細川山のつゞきの上なり 其名所八雲御抄に 細川山のみなかみより

万葉
御食向南淵山の巌には落る波多礼可けづりてのこせれ 人丸

は
真十鏡南淵山は今日も鴨白露置きて黄葉ちるらん

井垣於
吹く風にもみぢ葉ちらす南淵山乃谷行く川の 定家

男淵 女淵 細川村にあり
皇極天皇元年八月南淵の川上より跪きて四方を拝し天に仰ぎて雨をいのりしに雷鳴して大雨降りて五日降り続き天下あまねくうるほひ百姓萬歳を称へ

日本紀 是時元朝四方拝の基ひなりけるかし 江家次第

加夜奈留美命神社 栢森村にあり 今葛神と称す 神名帳三代実録出

金剛寺 坂田村にあり 推古天皇十四年南淵坂田尼寺を建つと日本紀に出

都塚 坂田村にあり 名義不詳

飛鳥川上坐宇須多岐比賣命神社 稲淵村にあり 今宇佐宮と称す 二ヶ村の氏神 神名帳出

南淵先生墓 稲淵村にあり 今明神塚とてあり 請安といふ漢人なり 推古帝十六年勅によりて入唐し周孔の教を学び熟業して本朝に帰る 中臣鎌子連と蘇我入鹿の逆意を憤り これを滅さんとて共に謀る

龍福寺 稲淵村にあり 境内に竹野王の墓表あり 文字剥滅す

田麻呂第宅 同所にあり 大宰帥宇合の五子なり

呉津孫神社 栗原村にあり 今下の宮と称す 神名帳出

勾池 島荘村に真弓池あり 勾池とは此池の事なり

嶋宮 勅撰名所に高市郡とあり 大和國とす

万葉
は 嶋宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池にかづかず

は 嶋宮のほかの池なる放ち鳥ひくゝあふぎて池にかづかず

は 嶋の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君ませるまで 舎人

は 高光る我日の皇子のいましせば嶋の御門は荒れざらましを 仝

岡寺（をかてら）

東光山龍蓋寺 一名岡寺　欽明天皇の皇居岡本宮の地なれバかくいへり　天智天皇の御願
義淵僧正の開基なり　西国第七番の順礼所なり　義淵僧正ハはじめ童乃時天智帝
いたくあはれみ給ひて只皇子と同じく岡本宮にやしなひ成長させ給ひ出家し
たまひて行者となり入唐熟学し帰朝の後大和国におゐて
龍蓋寺 龍門寺 龍福寺を造営し大宝二年僧正に任じ神亀五年
十月に入寂す 禮部に勅してその喪事を監護させ給ひぬ　釋書
本尊ハ如意輪観世音なり此仏胎に籠られし小仏ハ孝謙帝の御念
持仏にして唐土梵晉首君の作一搩手半二臂如意輪人身除厄の観音
なり中興弘法大師ハ三国の土をもつて丈六二臂の像をつくりかの小仏を仏
胎に収め給ふ寂初弓削道鏡此寺に住給ひし時梵晉首君父の命にて
むかし害せんとするの時ハ姫のがれて龍蓋寺に入枚の林に隠る道鏡が日
足秘る首君が厄災に出るの卦ありとて如意輪を作るべしと命ぜし所
金仏を作りて其難を免る道鏡此尊像を先清く孝謙帝に奉り

其ハ後伽藍を造立しかの尊像を安置し同月初午日天皇行幸ありて
く落慶の式ありて捨蔵松日丈六の土仏ハ弓削法皇の造立ありて其道
より炎上ありしを弘くくりて除厄しろ人尊像のよしを鏡にあり
へせり奥院の霊水ハ弘法大師龍神を祈て給ひしかハ忽清泉洋々
として盈満せり諸人これを呑で厄疾をのがるゝとぞ
後園これを信用せさるよし詮要抄曰橘寺の艮十余町ばかりに小原と
いふ所その納登伝曰高市郡龍池の北の岡小林の荒中といへ撰集鈔通要
なり　聖徳太子十二歳のとき童子達二十六人を誘引なひて後園にて
遊びて詩賦のおそびありしに童子その遊にとり太子みえ給はざれバ
なげく句句を残しおいて其行方みえざる人あそ我父母にむかひさる所
顔に浩りし人其親々様々の疑文をつくりにとりなり太子
其辞ある諦ましなほどいへるかし天皇 用明帝 我児聖今に
とは争かくさむらんやと敷色ありしを妃これに於ひ
あへとるかん　平氏作

逝回丘（ゆきかへりのをか）
風雅
旅人のゆきゝの岡は名のみして花にぞとまる春の木のもと
為家

遊岡丘 岡飛鳥二村の間にあり

万葉 明日香の遊岡岳の秋萩は今日ふる雨にちりかすぎなん　丹比真人

続後拾遺 旅人のゆききの岡も白露のおきてや秋の袖かむ　家隆

新後撰 飛鳥川ゆききの岡の葛かづらしのびてあらはるる恨ならねと　常光園入道前関白太政大臣

岡本宮 舒明天皇の皇居也又斉明天皇も岡本宮に遷てのちに日本紀に見えたり 又林村に曰岡本宮又橘ちのひろし遊田岡今の岡ちの地に礎のこれりて

治田神社 岡村にあり今八幡と称す

遊岡 大和志高市郡丈苑の條に載す未考

六帖 笛吹の社の神にちかふことは遊の岡やり通ひくらん　大納言之任

倭彦命墓 弥口村に窟あり一丈四方あり

人皇十一代垂仁天皇の母后の御弟なり日本紀に曰其二十八年十月にかくれさせ給ふ十一月身狭桃花鳥坂の陵にをさめ奉る其の時にしたがひし近侍の人々を殉死として生ながら陵のめぐりに立てうづみおかれけるに久しく死なずして朝夕に泣悲む声を帝きこしめし天皇これを聞召てふかく御心に悲傷し是いにしへの風俗なりといふとも不善なり後の年止むべしと群臣に詔し給ひけり

鬼厠 鬼肉几 倭彦命の墓より西ある田の中にあり是鬼石欄又いはゆる石盤みつあり世の人ならはしてわけるに石をならべひとつとおしへたりそや 大和志曰倭彦命の墓石棺窟中方丈餘あり大石五片をもつて作れり磨礱精功なりして今半は毀る石棺石蓋路傍に棄られ土人鬼厠鬼肉几とよぶ

檜前川 前の隈ともいふ水源は飯山よりながれて檜前の隈を経て真弓に至て真弓川といふ

古今大歌所御歌 亀山殿七百首 さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだにみん　御製

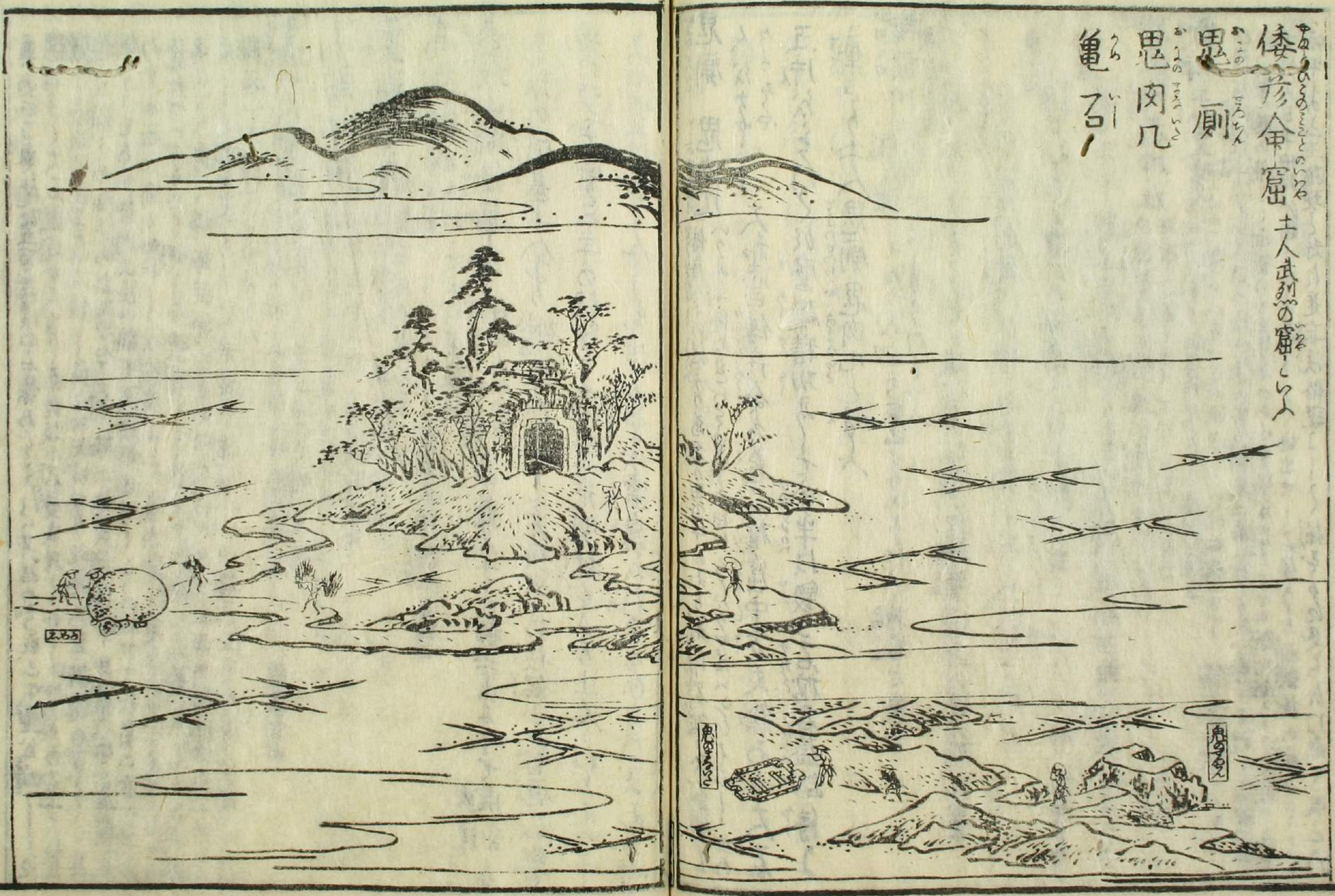
檜隈川の水の中へにし馴てはむまちつけてさしくみて駒なめてくまひの隈川にしばし水かへ人の影みん

続後撰 駒とむるひの隈川の底清み月さへ影をなほうつしけるかな　権中納言長方

玉葉 駒とめてなほ水かはんひの隈川のみなかみ月雨乃須　中臣祐成

於義阿志神社 檜隈村にあり檜隈大根田二村の氏神とす俗に神名帳出

欽明天皇陵 平田村にあり俗に梅山といふ陵考図之 此陵の御経にはいかにも山に石仏の四躰あり内二躰は背あはせに一面づつあり又二躰は膝の傍に面を向ゆへ一面は向て左右の像あり又二躰は膝の傍より面貌のかたちのおそろしさに四躰九面あり元禄十五年十月八日平田村池田といふ所より堀出せし石像なり面貌猿の面にわらひたるくせなり是より山王権現と称す是妄説俗説にしてゐるなり堀出しより猿石と云るゝ門前を坂と山乃


倭彦命窟（やまとひこのみことのいはや） 土人武烈の窟（いはや）といふ
鬼厠（おにのせつゐん）
鬼肉几（おにのまないた）
亀石（かめいし）
鬼のまないた
鬼のせつゐん

東壺坂寺奥院に五百羅漢の石像あり是ハ其始め高取山に壘を築かれしとき
此山より大石運送に人多く死せり故に石壘成就しける後其石に仏の
形を彫て壺坂の観音に立願し終に功を成せり此帰大悲擁護の旅とて其
像を滿しめんがため數百の石工を一時に聚め二躰を都造し巨巌の面に羅漢を
彫るもあり絵則る此四躯も其時彫造せしものなり仮沓の方に面を
あらはし初て造り出けれど捨置しものゝ心せり是を以ての如の
意に叶はざるを俄に捨置しが石なるとて巌是の形ぞ小堂建
ありしを悉く佛躰成就のものにあらざれば能く石像なれど平田村池田の土中より
久しく埋もありしなれ後中穿出し此梅山に至る古跡を存く為
因縁と称するものなりん

文武天皇陵 平田村の西にあり俗に中尾の石墓といふ 陵圖考曰 字ハ高松といふ高サ二間二尺廻二十間

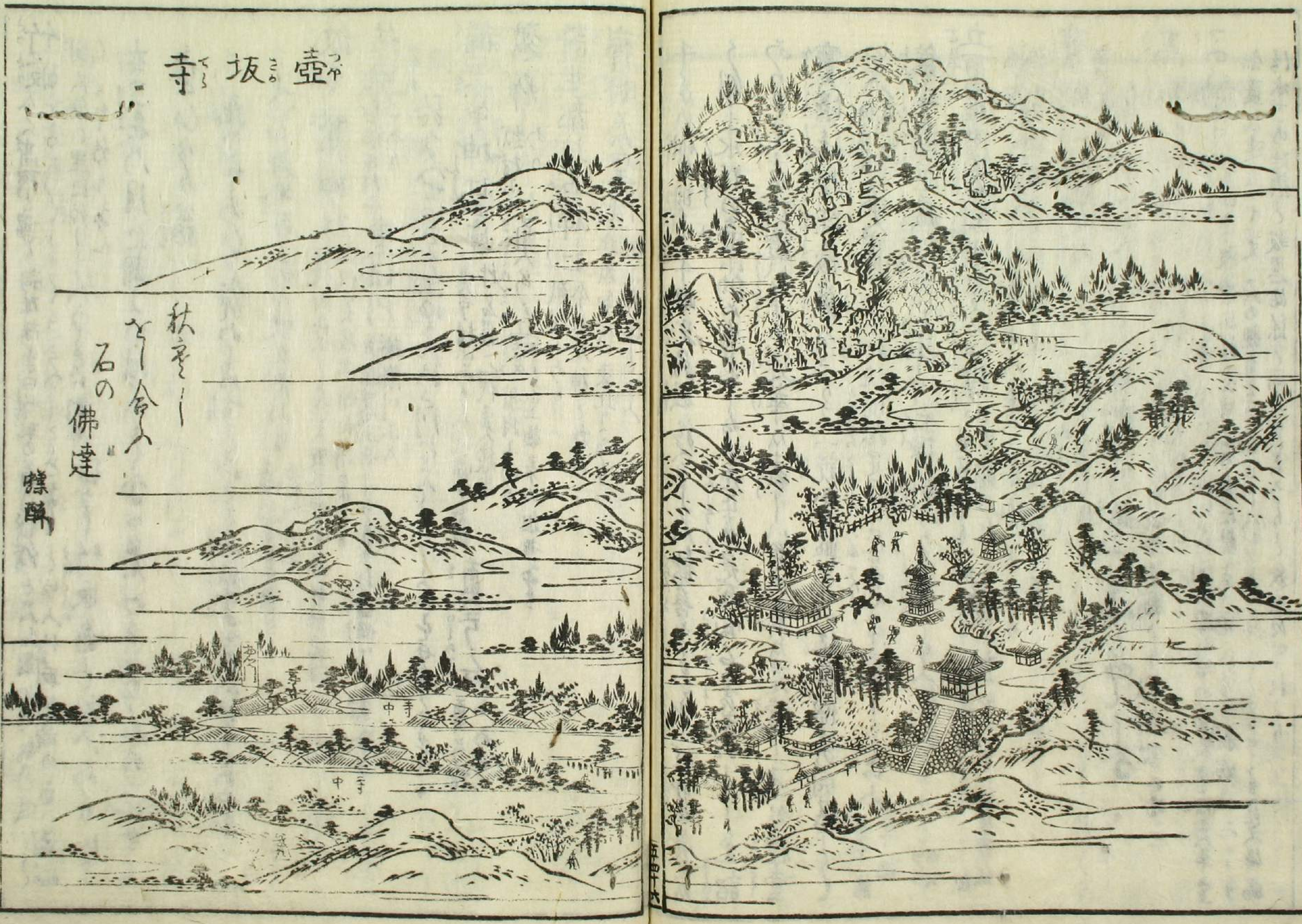
子嶋神祠 小島村にあり今ま日とて称す 土佐村と共に氏神とす 三代実録出

霊鷲寺 清水谷村にあり桃源山と号す 跡習家数の墓あり

高生神祠 高取の山上にありしを天正年中清水谷村に移す 三代実録に出

壺坂山南法華寺 清水谷村の東壺坂山にあり 本尊ハ千手観世音なり開創ハ
元明天皇の道基上人なり 初め上人かとしえ興福寺の住侶にて智徳名誉
世に秀たり大寶三年の比此山に光明赫々として上人かゝるやし
み此霊地なりとし此處に来り自ら霊應なるを希ってこのひとつよりあらは

千手の相を現し千眼光を放つ是ハ上人歡喜して御門に此奇瑞を奏
しけり水精の壺に納め安置し元正帝是を聞召て石光寺の號を詔
ありて大士の内證八葉の蓮華を表し八角の殿を造営し外に禮堂
寶塔鐘樓經藏山號などあり 又一説に元興寺の海辨僧正の開基とし
以て 伽藍開基記 又大寶三年に佐伯姫足子の尼若心建立せしといふ 帝王編年記
鎮守祠 龍藏權現ハ吉野川木根より出現しあいて龍神なりしかや
五百羅漢石 両界曼陀羅石 巨巖あり 壺坂寺より八町あまり高取山にありて石面に彫つけたり 壺坂
奥院としいふ ゆのちれ真興上人造立し縁起にみへたり 傍小石燈籠あり 勅白慶長十一年本多俊政創立之
鷹羽山 壮佐ノ町上方にありて今ハ高取山といふ 一郡の主山なれ
相撲家集
狩人のこゝは日ありとも鷹羽の山に雄子なれともしるかし
高取山城 南郷にあり佐伯山を登る坂路羊腸より是要害の地
子嶋寺 高取山にあり小堂一宇のみ開山の報恩法師長岡宮の帝に観音の咒を奉り
伽藍を建立し一丈八尺の観自在の像を造る
清水寺の延鎮と報恩法師と同人異名なりし釈元にあれども


壺坂寺
秋寒し寄し合へ石の佛達
蝶酔

竹取 今ハ高取と書り 詞林採葉曰竹取の翁乃所ハ大和國に竹取乃城あり 竹取翁の翁ハ後に
國大個の里に住し人なりといへり むかし竹取翁といふ人ありけるに
春すぎ乃月に岡よりのぼりくるかな 光けるに九人の仙女あひたり 公翁
死なばこそあひみずあらめいけらくは白髪子らにおひさらめやも
又をとめらのよめる歌九首あり 妻ハ万葉集にのれり

波多甕井神社 羽内村にあり 今天照太神と称す 神名帳二代実録出 傍に清泉あり

佐田丘 佐田村にあり

重坂川 源葛上郡よりながれ壺坂川と号す 檜隈川に入

驚かでいつみ川にたぎこしなをとかすてし

櫛玉命神社四座 真弓村にあり 今八幡と称す 神名帳二代実録出

真弓丘 真弓村にあり

越野 越村にあり

真弓丘陵 越村にあり 皇極帝の祖母命

許世都比古神社 越村にあり 今五老神と称す

齊明天皇陵 北越智村の東北にあり 俗に升塚といふ

巨勢山坐石椋神社 古瀬村東南にあり 今素盞烏と称す 神名帳出

鳥坂神社 鳥屋村の東にあり 今天照太神と称す

宣化天皇陵 鳥屋村にあり 陵考圖云字ハミサンサイ山といふ 元禄十二年周廻り百八十七間 池あり 外に小塚八つ 中に大なるもの 里人曰武内墓といふ

石椋小野 鳥屋村にあり

牟佐坐神社 見瀬村にあり 神名帳出 今境内に天神と称す

益田池 大和志曰弘仁四年 陛の址北は池尻村 東は檜隈にいたる 見瀬村の西南の丘の上に碑の趺石あり 俗に岩船といふ 高二丈八尺 縦二丈五尺 横一丈二尺 上に両方の孔あり 鑿一槽とし 碑身今なし 其銘ハ釋空海性靈集にのせたり

久米寺のかたより花出山といふ際に益田池の跡ゆくく山に遺りの堤あり 西につゞきて池尻村といふあり 是より南に碑とよべる甚石今にのこれて 池尻よりこゝかしこ里ばかりの間むかしは池なりけり 碑銘に廣大の池とありしも思ひあはされり 今は僅にのこりてせまくなりしものなれど その池の岸とおぼしき所に弘法大師の建給ひし碑の破石あり 碑はむかしより代々いかなる人の外にもちいにしりん 其由縁をえらべば其碑文世に伝ふ 今そのかみに至りて縦横放蕩なる大字にてぞ 試にこれを連続してみたるに許多の大碑なり

一説曰益田の碑石は高取城の石垣に積込ありしとぞ 古くこれを人々見たるともいふ 凡七里ほど廻る 城をきづきし方に至らんもなき 和とのあいし 断碑の趣を如是の代には観せんや

益田岩船

花もまだ見ぬまゝには
深山の花乃まゝに
散のこり岩陰に
咲乱るゝ谷の 里人
此岩船のうへ みてく
風も人なき跡に
なりし日の うすひ
海棠の花の
紅ゐにもなき
晴るゝの初春に
おとなきさくらも
一具やつゝん

益田の池は名のみ井と云り此池ハ漢直の舊宅なり嵯峨天皇の御宇
田畑の損るを愁ひ給ひしか弘仁年中紀大和守藤末嗣と縄主
紀伊守末等に此所の地理佳さるを以て池を堀らんことを奏
しけれハやかて勅許ありしより縄主末等直圓律師とともに会て池を
堀らせ給ひ大伴泰範圓道和州太守藤原広を池の撿校職に補せ
られしより或ハ旱魃と云とも田に益の功ありしより益田池と號
せられたりとなん云伝ひたり

金葉
波まくらいかにうきねを定むらん氷益田の池のをしとり　前斎宮内侍

続千載
思のミ益田の池のうきぬなは絶ぬ笑そくるしかりけれ　倭成女

新続古今
思のみ益田の池乃水ならてしらぬあやめの猶ぞ乱るゝ　順徳院

益田池碑銘曰

大和州益田池碑銘 并序 并沙門遍照金剛文并書

若夫感星銀漢下灑之功深湖水天地上潤之德普故能中𠕒因之而鬱茂蟲卵頼之而長生至若八氣播殖五丈陶冶北方之行偏居黄最坎之爲德遠矣哉皇矣哉奥有益田池兩尊皇子之洲八嶋初道之國地是漢諳之舊宅号則村井之故名去弘仁十三年仲冬之月前和州監察藤納言紀大守末等愍亢陽之可乏歎膏映之未開占斯勝處奏請之綸詔即應爰則令藤紀二公及円律師等叙功未幾皇帝遊駕汾襄藤公從之辭職紀守亦遷越前　今上膺尭揖譲馭舜寶圖照𤣥燭乎二儀撫赤子於八嶋簡伴平章車國道代撿國事並擢藤廣任判史両公撿校池事於焉青凫引塊數千之馬日聚赤馬驅人百計之夫夜集既而車馬轟々而雹徃男女礙々而雷歸土雰々而雪積堤倏忽而雲騰宛如靈神之挺埴還疑洪鑪之化産成也不日畢也不年造之人也辨之天也爾乃池之爲状也左龍寺右鳥陵大墓南聳畝傍北峙米眼精舎鎮其艮武遮荒壠押其坤十餘大陵聯綿虎踞四面長阜邐迤龍臥雲蕩松嶺之上水激檜隈之下春繍映池觀者忘歸秋錦開林遊

人不侏、鴛鴦鳧鴨戯水奏歌玄鶴黄鵠遊汀爭舞亀鼈延頸鮒鯉掉尾
淵獺祭魚林鳥反哺泊如積水含天疊山倒景深也似海廣也超淮笑
昆明之非儔哂耨達之猶少虎嘯鼓濤則驚洑洑漠龍吟決堤則客輿
不飽襄陸之罔象不得溢其塘憔山之女魃不能涸其底六郡蒙潤萬
滄湯々一人有慶兆民頼之舞之蹈之詠千箱以擊腹千之足之唱萬
歳而忘力歎蒼海之數變索銘詞乎余筆貪道不文當仁固辞不能謀
虚吐章迺爲銘曰

希夷象帝　一未萌　盤古不出　國常無生　元氣倏動
萌芽乍驚　八風扇鼓　五才縱横　日月運轉　山河錯峙
千名森羅　萬物雜起　藤麿既隠　稷秔爰始　天地人地
灑露功似　前堯後禹　慮厚恤人　智略廣運　慈悲且仁
機事不測　成功若神　潤物如雨　榮人似春　綸緣雷霞
有司創功　紀藤薙草　杲續圓豊　伴相施計　原守在公

良才奇術　民具靡風　爰有一坎　其名益田　堀之人力
成也自天　車馬霧聚　男女雲連　歸来似子　畢功不年
深而且廣　鏡徹紺色　滉瀁瀰漭　瞻望罔極　百溪之宗
萬派之職　魚鳥遊泳　虬龍斯匿　畄畜播殖
孳孳我執　鏃々我穪　如坻如京　足兵足食　井田我事
堯帝何力

觀鷲百譚云益田池の碑銘の眞迹ハ讃岐國にありしといへり今換しく傳ハるハ大抵印本の足らざるもの多し又高野山明王院にもありしく此模写と互ひに異同あり

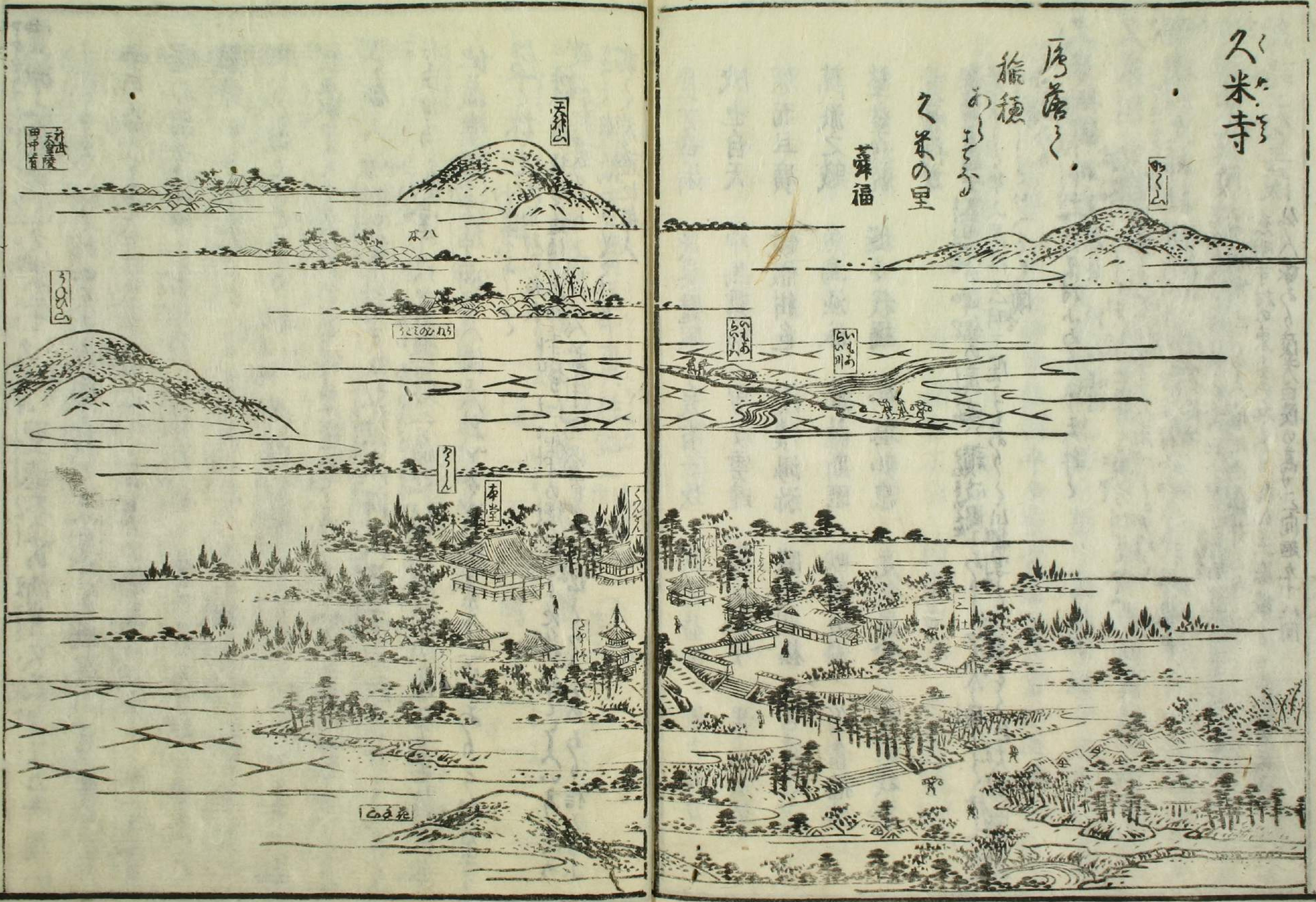
久米御縣神社　久米村にあり今天神と称し神名帳出

久米川　檜隈川の下にて其流れ三瀬を経て久米に至りて眞弓川といふ

輕樹村坐神社　神名帳出　此邊の屬邑輕子村にあり今社廢し

安寧天皇陵　吉田村の内池井の西の丘にあり祠廟ハ井の東南にあり

綏靖天皇陵　慈明寺村の東南の丘にあり俗に主膳塚といふ陵の南に仏人塚あり陵考白陵の高さ二丈廻九十八間



久米寺
天神山
八本
本堂

霊禅山東塔院久米寺 久米村にあり 聖徳太子の御弟久米皇子の御願に
して本尊は薬師如来の座像長八尺又皇子の感得の尊像は薬師
仏の長一寸二分黄金の壺に納て本尊の仏胸に安置し奉るなり多宝
塔は養老年中に善無畏三蔵来朝し当寺に二十五年住して南天竺乃
鉄塔の中に分かれたりし其心柱乃下に仏舎利三粒大日経七
軸を籠られたり 仏法伝通記 其後延暦十四年弘法大師夢の告
ありて来りて久米の道場東塔の下において乃七軸の経を得玉ひ
さる人 釈明名来目寺なり弘法大師久米寺と改字せしとぞ
ころより東堂は善無畏三蔵弘法大師の像を安置す其外
地蔵堂護法神祠は天満天神をまつる緇素十二家ありて是なん寺
僧と称す 久米村に住して
今の多宝塔を造須薬師寺仁和寺の塔の如く擬して
礎石往古の遺址なり又世に久米寺宝塔真柱の銘として其銘の書ありて信ずるに
足らず姑く考証に備ふ

久米寺宝塔中真柱銘（迷体一作幽旨）（弘一作孤）

月九中岸閑居一一露五迷體弘身一一法
一不随一一一道一不一時旨一一

或曰空海之手蹟而高野山妙瑞和尚為之附訓云之

今昔物語云今はむかし元明のみかど帝内裏を大和国高市郡に造営し給ふ
時は国の中に丈夫を催して其役につかしむ其中に仙人ありけるよし
聞ゆ行事官の者あやしみて安曇は仙人にてありけるがいまはいづこぞと問ふ
夫の者こたへて曰く此者は久米といひし仙人の年当国吉野郡竜門寺に籠りて法を行ひて
仙となり空に飛行しけるが吉野河の辺にて若き女の衣を洗ふを見て
脛の白きを見て心けがれて落ぬ其女を妻となして今に有りそれより久米仙人とは云ふ
しかじか仙人とはいへども行事官
とて扱ふ者なくてかゝる役に従ふと答へき 行事官聞て
おろかなる仙人かなと笑ひしが久米はくちをしく思ひて
猶よく仙法をおこなひしかども欲にふれて堕落しぬる身なりしがいかにもして
年頃積み修行し本意をとげむと思ひしかば行事官
にむかひて我仙法をおこなひて材木を空より飛ばしめんといふ
あざけりて行事官ども笑ひけれど七日七夜おこなひて八日にあたりし時
七日七夜祈りて八日に雷鳴して空かき曇り雨ふりて暗くなりぬ
暫くありて其時に晴れ渡りて南の山より材木空を飛びて
造営の所に来りけり行事官みな驚き尊みて久米を敬ひけるとぞ
これ久米寺の由来なり今久米村に華洗池あり昔久米の仙人の落ちたる時
衣を洗ひける女の居し所といふ

釋書曰

久米仙者和州上郡人入深山学仙法食松葉服薜茘一旦騰空過故里會婦人以足蹈浣衣其脛甚白忽生染心即時墜落

つれ〳〵艸に
久米の仙人の物
あらふ女のはぎの
しろきを見て通を
うしなひけんはまこと
に手あしはだへなどの
きよらに肥えあぶらづき
たらんはほかの色
ならねば○さもあら
んかし

鬼頭田　高田丘の西に石多く化せる頭二ッ田の中にあり　其のさま人の首のことし　二ッの石ハ一ッハ法師の頭なり一ッハ鬼の頭なり　むかし此所に僧と鬼とあらそひ終に法師鬼の頭をとりて共にこゝに化して石となるといへり　その石の首を今に此所の田の中に残れりといふ

畝火山　畝傍村の上方にあり大和志曰巍然として特立し　他山相連ならず

諺峰縁起便蒙曰　畝火　畝傍　雲飛　雲根火

八木村の南一里計谷に慈明寺といふ

大和の三山の一也　山に神功皇后の廟あり

万葉　思ひあまりいたもすへなみ玉たすき雲飛山に我しめゆはむ
家持家集　あさ霞たなひく山の頂の雲根火のはらにわれはきにけり

畝火山口坐神社　むかしハ畝火山の腹にあり今山頂に遷れり　延喜式名帳に載る所　神功皇后を祭る　畝火明神とも称す　祠の跡とて石あり今御旅所とす　官幣の國源ちかくして人家の様に神祠の跡とて石あり今御旅所とす　此山腹に馬繫と云所あり　畝傍・大谷・吉田・慈明寺・山本・大窪・四條・小世堂　各の氏神なり　毎歳十月朔日霜月初子日摂州住吉社より禰宜一人　土持一人僕二人馬一疋を牽来て此山の上の土を取る　旧例としてこれを行ふ　此代よりはしまりしにや　畝火山の巖の際より陶器出る　雨後多く出る　此巖石の土に近き所より砥石出るよし　又此山の土にて製造のものに岩堅くして全きもの　その形勝いさゝか欠損して全きものなし

按に是則いにしへの埴輪の類なるへし　但昔此北に萬願寺といふ四十二院あり　しかし其跡礎石多し

懿德天皇陵　畝傍村の西繊沙溪にあり　祠廟ハ村の東北にあり　里人はイトクノ宮陵といふ　考圖云高五丈　平芝廻四十五間　垣廻四十二間　此陵の西に小荒陵あり　此所村に屬す
傳云皇后の陵也と

娘子塚　大久保村にあり　むかし此所に娘子あり容顔美艶にしてかゝる人道にも願くハ貴きを求めて櫻児といふ　又二人の壮士ありて此女を求めて相敵す　娘子是を見て歎きて人に語りて古より今に至るまで一女二門に適くをきかす　今や壮士の意和平かたし　妾か死して相害を永くやめんとて林中に入て樹に懸りて縊れ死す　萬葉集にのせられたり
摂州菟原郡に処女塚と云所あり

大窪廢寺　大久保村に址あり觀音堂是也　此名に因て大窪寺といふ　これハ相似たる名所圖會に出す
東金堂西金堂あり

高市御縣神社　四條村にあり今高縣宮と称す　延喜式名帳に出
式代実録出

井谷井　弘法村にあり　旱に竭せす　御陵山　山本村にあり　小祠あり　綏靖帝の兄神八井耳命の墓といふ

天満之
長寶寺（ちやうほうじ）

神武天皇陵 山本村にあり 洞處ハ大窪村にあり 陵考曰字ハ塚山といふ 畝傍山の東北之高七尺八根廻三十間頂三十二間 延喜諸陵式曰 畝傍山東北陵 畝傍橿原宮御宇 神武天皇在大和國高市郡 兆域東西一町南北二町守戸五烟

古事記曰 畝火山之北方白檮尾上

前王廟陵記曰 畝傍山ハ今ある所の西南六里久米寺の北にあり俗にいふ慈明寺山是也

性霊集 益田池碑銘序曰 畝傍北峙

東北の陵百年荒られなば壊って糞田となれり土民其田をめぐりて神武田と字をも暴汚ところにして痛哭すべきことの餘り數畝の餘りて一封とし農夫これに登るに恬として怪とせず世これが觀にあそんで寒んぜざらめやは 夫神武天皇ハ神代草昧の跡を継東征して中州をたひらげ四門を闢く八方を朝せしむ王道の興治教の美實にて小創の我國の君臣億兆に至るまで尊信すべき廟陵なり

日本紀曰神武天皇御宇七十六年三月橿原宮にして崩したまふ寿齢一百廿七歳 翌年山陵にをさむる 古事記御年一百三十七

宗我都比古神社 曾我村にあり今入鹿宮と称す 神名帳 三代實録出

蘇我の河原 蘇我川北にあるゆゑかくのなく上ハ蘇我臣の家地として蘇と宗と通ひ用ゆるなり 類聚國史 萬葉集等に宗我とかけて

万葉 真菅よし宗我の川原に鳴千鳥間なし我せこ吾こふらくは

小綱村 此所ハ新堂といふて初瀬街道なり 明暦万治の頃此所に傾城郭ありしが今ハ没てなし

天高市神社 曾我社の南にあり今高市八幡と称す 神名帳 三代實録出

万代 ふるさとし昔の人を我忘しにたる高市の宮に月を照して

地黄村 上路といふ 此所 地黄出る

人麻呂祠 地黄村にあり傳に池ありて此所に櫻樹数株なる人をうつ花のころハ人麻呂觀とし此櫻乃下に石彫の貌ありまさに尊く匂ふ 玉峰騎一明神と勅請せり

玉葉集 柿本人麻呂墓所にてかきて讀侍ける 柿本明神に

古へのなに苔の下までくちせずハ猶とるふでのあとをかなしや 安蓮法師

金橋宮 曲川村にあり安閑天皇の皇居の地也 日本紀出

川俣神社 雲梯村にあり今ハ牛頭八王子と称す 神名帳 三代實録出

太玉命神社 忌部村にあり 神名帳 三代實録出

稲代坐神社 常門村にあり今天満宮と称す 延喜式神名帳三代実録出 天神祠 根成柿村にあり社前石燈籠あり 建武二年と刻す

長法寺 常門村にあり寺前に石燈籠あり 勅日正和五年施入於長法寺 法器山寺 在所不詳 日本霊異記出

菅丞相山荘 在所不詳 昌泰元年十月十五日太上天皇宇多帝 御鷹狩に吉野の宮瀧に行幸ありけるに貞数親王清和帝第八皇子 右大将菅原朝臣小野大弁 其外上下陪従廿二人従ふ御門をいでて上皇寮馬にめして道をいそき乃寺々を御巡覧ありしかるに素性法師を御駆にめしまつりける廿二日とらへに高市郡右大将の山荘に御一宿ありて歌よませ給ひて和歌をよませ給ひし 帝王編年記に見へたり